

山形大学図書館に存する青島鹵獲書籍について

— その比較文化的考察 —

奥 村 淳

(ドイツ文学, 比較文化・比較文学)

山形大学図書館には現時点で確認されただけであるが、いわゆる青島鹵獲書籍が108冊存在する。第一次世界大戦において日本は日英同盟を好機として中国山東半島の膠州湾一帯を攻撃した。膠州湾一帯はドイツの租借地となっており、要塞のある青島が中心地であった。戦闘の結果日本は戦勝国となり、ヴェルサイユ条約によって租借地におけるドイツの動産、不動産の権益を獲得する。その中には多くの洋書や漢書が含まれていて、これらの書籍は日本に運ばれ各機関に分配された。これが青島鹵獲書籍である。鹵獲書籍は旧制山形高等学校にも配分されている。従来の研究ではその数は11冊とされていたが¹⁾、筆者の調査ではその数は108冊となり、11冊を大きく上回っている。またその数は今後増える可能性がある。以下においてはこの鹵獲書籍の作者名と書名を明らかにすると同時に、鹵獲書籍の分配事情を考察し、さらにこれらの書籍を通して見られるドイツ軍の文化実情を日本軍と比較文化的に考察する。

(1)

日本は第一次世界大戦に参戦し、ドイツと戦った。第一次対戦は1914年7月28日のオーストリアーハンガリーのセルビアに対する宣戦布告に始まる。ドイツは8月1日にロシアに、8月3日にはフランスに宣戦を布告した。ドイツは開戦当初は楽勝ムードにあふれていたらしく、前線の建物内で陽気にビールジョッキを傾けるドイツ兵を描いた絵葉書がそれを示している。その奥ではビール樽を囲み、同じく陽気にワインを飲む10数名の兵士や将校が描かれている。絵葉書には「がんばってるぜ！ビールとワイン、葉巻の紫煙、戦闘における憩いのひととき」²⁾という説明がある。この絵葉書については「彼らは喜んで1914年秋に戦争に行った。なぜなら勝利は指呼の間にあるように思われたからである。」³⁾と説明される。日本でも事情は同じで、やはり楽観ムードだったらしい。勝利した日露戦争はまだ9年前の話であった。たとえば「新宿駅の出征部隊」⁴⁾という写真では汽車の窓から大勢の兵士達が身を乗り出して、多くは日の丸の旗を振っている。笑顔で白い歯を見せている者もいる。筆者はかつて、山形で「征くは青島か」という説明つきの写真を見た記憶がある。神社を背景にして出征前ら

しい二人の兵士が並んで立っている写真である。その顔は絵葉書のドイツ兵に負けずにはれやかであった。山形市には仙台の第2師団管下に歩兵第32連隊が設置されていて、山形県内では霞城(かじょう)32連隊という名前で知られている。霞城32連隊からは開戦まもない1914年(大正3)9月に中隊が天津に出動し、1916年(大正5)8月から翌年9月にかけては第3大隊が青島に派遣されている。記憶の中の写真は第一次大戦当時の日本の一般の気分を示すものと考えられる。「フランス、イギリス、ロシアを中心とする連合国と、ドイツ、オーストリア・ハンガリー帝国とその支援国との間で争われた第一次世界大戦は、近代兵器の乱用によって、欧州大陸におびただしい死者の山を築く、悲惨きわまりない戦争となります。しかし、日本はそれを真正面から経験せずにパスしてしまったことで、総力戦というものの怖さを実感できなかった。日本も参戦したことになっていますが、せいぜい東洋におけるドイツの拠点だった中国大陆の青島(チンタオ)を攻略して、名産のビールを飲んだぐらい、というのは少しきついな(笑い)。」⁵⁾猪瀬直樹のこの発言を受けて、阿川弘之は「まあ、青島を攻略してビールを飲んだだけじゃなくて、実際にはかなりドイツ艦隊と戦っていますがね。地中海へは駆逐艦を十二隻派遣していますし、……」⁶⁾と修正している。ドイツ艦隊との地中海の戦闘では78名の戦病死者があつて、ほとんどはマルタ島に葬られたし、サイパン島やパラオ島などドイツ領だった南洋諸島でも戦っている。青島要塞の攻防戦も楽なものではなかったのである。

日本軍の青島攻略は1914年(大正3)8月23日の対ドイツ宣戦布告に始まる。9月そうそうから始まった戦いの中心は久留米の第18師団であり、青島攻囲軍司令官はその師団長だった神尾光臣中将だった。戦闘の結果、同年11月7日に青島のドイツ軍は日本に降服をした。この間のドイツ側の動静についてはゴットベルク(Otto von Gottberg)の「青島の英雄達(Die Helden von Tsingtau)」⁷⁾(1915)が詳しい。日独開戦前の青島の様子や日本参戦の噂、女性子供の避難計画や兵力増強の手立てなど興味深い内容である。開戦当初の9月初旬は豪雨続きで、敵味方ともに苦しめられたことなども記述されている。

青島陥落後ドイツ本国では11月7日の攻防を描いた「日本兵と英国兵最後の攻撃と英雄的防衛」⁸⁾という絵葉書も作成されている。小高い丘の頂上とおぼしく、頂上にはドイツ側の大砲の残骸が見られ、右側のドイツ兵と左側の日本兵が戦っている。英国兵の姿は遠くにある。青島をめぐる戦いにおける双方の戦傷者数については諸説がある。戦死者に限定すれば、ドイツの公式資料によれば日本側は1303名(将校37名、兵士1266名)、ドイツ側は189名であるという。⁹⁾ただしかなりの数のはずの戦病死者は除かれている。一方日本側は1014名(陸軍676名、海軍338名)という瀬戸の調査がある。¹⁰⁾いずれにしろ日本軍の戦死者の多さが際立つ。とても名産のビールを飲んだだけという状況ではなかったことが知られる。青島にいたドイツ人宣教師ヴィルヘルムの日記には以下のようにあるという。「日本軍の攻撃の仕方は

兵士に状況の判断をさせないで、犠牲をかまわずに突進させる。だから戦死者の数がドイツ側とは比べものにならないほど多くなるのだが、兵隊たちになまじものを考える余裕などを与えると、戦闘力が弱まるというのが司令官たるものの心得だというのである。」¹¹⁾この攻撃の方法は日露戦争における旅順攻防戦でも同様で、その模様は桜井忠温の「肉弾(旅順実戦記)」(明治39)によって世界に喧伝されたものだった。「青島の英雄達」にも日本兵の「大声の万歳突撃」¹²⁾についての記述がある。しかし同じ現象はヨーロッパ大陸でも起こることになるのである。青島攻防戦に遅れることほんのわずかで起こったいわゆる「イーブルの子殺し」¹³⁾である。ベルギーのフランドル平野の中央部の町イーペルン(Ypern)の北8キロの村落ランゲマルク(Langemark)一帯では塹壕をはさんでドイツ軍と連合軍が対峙していた。そして1914年11月10日ドイツの若い志願兵からなる連隊が敵の機関銃めがけて突撃を行い、最終的には3週間で4万人近くの若者が戦死する。「彼らは攻撃の際に『ドイツの歌(Das Deutschlandlied)』歌っていたという。機関銃は攻撃部隊と時代遅れのヒロイックな突撃を粉碎した。」¹⁴⁾「ドイツの歌」とはかつてのドイツ国歌「世界に冠たるドイツ」である。現在ランゲマルクには第一次大戦の4万5千人の戦死者の墓地があるという。ギュンター・グラスは「私の一世紀」(2001)の「1914年」の章でドイツの作家レマルク(Erich Remarque, 1898-1970)とエルンスト・ユンガー(Ernst Jünger, 1895-1998)に架空の対談をさせている。「西部戦線異常なし(Im Westen nichts Neues)」(1929)の<反戦>作家と「鋼鉄の嵐の中で(In Stahlgewittern)」(1920)の戦争<肯定>作家の対談という体裁である。「レマルクが口を切った — 十四年の秋、私はまだオスナブリュックの高校に残っていましたが、志願兵連隊に入った同世代の若者は、もうシクスショーやイーペルン[イーブル]の戦場で血を流していました。その頃伝説のように語られたランゲマルクの戦場の話—ドイツ兵はイギリス軍の機関銃の砲火に対してドイツ国歌を歌って応答したという美談—を聞かされてものすごく感激しました。たぶんそのために一教師たちから激励されたために—高校のークラス全部が軍隊に志願するということにもなったのです。その半数は戦場から戻りませんでした。」¹⁵⁾たとえば「西部戦線異常なし」のカントレック先生などが上でいわれる「教師たち」のひとりになるのであろう。「このカントレック先生は体操の時間に僕達にながながと講演を聞かして、そのあげくついに僕らのクラスは、この先生の引率の下に、一しょに徴兵区司令官のところへまかり出で、出征志願を申し出たのである。僕はまだこの男の姿が目の前に見えるようだが、眼鏡の玉を光らして僕たちを見て、感動的な声を出して、『君達も一しょに出るだろうな』といったものだ」¹⁶⁾「僕」はランゲマルク近郊から休暇で帰郷したという設定である。志願兵の中心をなしていたのは学徒兵であった。「ドイツの学生たちは訓練不足だったとはいえ(徴兵令は、学業が完全に終わるまでは、学生の軍務を免除していた)、自ら志願して第二十二軍団と第二十三軍団を実質的に構成する兵士となった。そしてこの軍団は

1914年10月には二ヶ月の訓練を受けてから、ベルギーのイープル近郊でイギリス陸軍正規兵部隊との戦いに投入されたのだった。その結果は、無垢な若者の大虐殺だった（ドイツではこれを『イープルでの子殺し（Kindermord bei Ypern）』と呼んだ。）¹⁷⁾ ヒトラーもまた1914年8月16日にバイエルン連隊に志願し、10月には前線に投入された。ヒトラーは出征を待つ訓練の間、「このころに、わたしだけでなく、他の多くのものもそうだったが、前線に出遅れないだろうか、という心配がただ一つわたしを悩ませた。このことだけでわたしはしばしば落ち着きを失った。新たに英雄的行為を聞いて、勝利の歓呼があがるごとに、かすかな一滴ののがみがその中にかくされていた。というのは新しい勝利のたびごとにわれわれの出遅れの危険が増すように思えたからである。」¹⁸⁾ ヒトラーが所属する部隊は「イープル近くの戦闘」¹⁹⁾に投入され、かつ「白兵戦」²⁰⁾では同じく「ドイツの歌」を歌ったというのである。ヒトラーの部隊は10月29日の一日だけで349名が戦死し、1年後には3,600名のほとんどが戦死したという。²¹⁾ 同じフランドル地方で1914年12月20日に戦死したミュンヘン大学の学生エーミール・アレフェルト（1892年ダルムシュタット生まれ）の1914年10月8日付けの手記の一節「我々は国民のために戦ひ、血を流してゐますが、生き残る人びとが我々の犠牲に値するものであることを望んでゐます。それは僕にとつて、一つの理念、純粋な忠実な公正な、不正と偽りのないドイツといふ夢像のための戦ひです。」²²⁾は今でも胸に迫る。1914年11月30日付けの「卑しさと利己心が追放され、忠実と名誉とが再び昔の権利を取返すやうな、美しい偉大な崇高なドイツに対する信仰のために、僕は戦ひ、恐らくはまた死にもします。さうしたドイツから我々はまだ遠く遠く離れてゐます。」も同様である。²³⁾

しかもこのような突撃精神は日本に発するという説まであるのだ。明治37年（1904）の日露戦争の帰趨を決定するのに大きかった旅順攻略の司令官は乃木希典大将だった。その参謀は伊地知幸介少将である。ふたりともドイツ留学の経験があった。二人は旅順要塞をひたすら正面から攻撃するばかりで、膨大な戦死者を出す。「たいへん凄惨な、肉弾攻撃の戦いが始まりました。無謀な肉弾攻撃でした。」²⁴⁾ 業をにやした本部は満州軍総参謀長児玉源太郎を派遣して指揮をとらせた。児玉は要塞ではなく、それを見下ろす位置にあった二百三高地の占領を最優先とする。激戦の末に占領するとそこから重砲でもって敵の要塞を攻撃した結果、要塞は陥落したのであった。水師營の会談やバルチック艦隊との海戦は翌年のことである。日本では今ではこの戦いの作戦能力については否定的に評価されがちな乃木将軍であるが、諸外国ではそうではなかったというのである。アメリカのルーズベルト大統領も桜井忠温の「肉弾」を賞賛したが、イギリスの公刊「日露戦争史」には「旅順の事例は、今までと同様に塁堡の攻防の成否は両軍の精神力によって決定されることを証明した。最後の決定は従来と同様に歩兵によってもたらされた。……旅順の戦いは英雄的な献身と卓越した勇気の事例として、末永く語り伝えられるであろう」²⁵⁾とあるという。「ヨーロッパでは日本軍の突撃精神

や犠牲的精神が高く評価され、見習うべき優れた特質であると受け止められた。このため、10年後に起きた第一次世界大戦では、ヨーロッパ諸国の軍司令官たちの脳裏に、日本軍の突撃精神が鮮やかによみがえり、突撃を繰り返し多くの犠牲者を出したのであった。』²⁶⁾司馬も秋山真之が私淑したというアメリカ海軍大佐アルフレッド・マハンなる人物の論評を紹介している。日露戦争終了後5年ぐらいたってからのものであるという。「日本軍は異例の才能と美質を持っている。しかしながら日露戦争の勝利によって、世界中の観察者達は、日本軍に対して超人的という非常な感嘆詞をもって覆うのみである。日本の軍人は他国の軍人の及ぶべからざる多くの長所を持っているという具合に、漠然とした褒め方を続けている。そのために、日露戦争から普遍的な教訓を引き出すことを怠っている。世界中が怠っている。』²⁷⁾マハンも「日本軍の突撃精神や犠牲的精神」を高く評価したと考えられる。

青島要塞攻防戦は日本に発する突撃精神を賞揚する東西の対峙という側面があったことになるわけである。しかしこのような精神はもともとドイツ的なものでもあったのである。それを賞揚した詩人にナポレオン戦争当時のオーストリアの詩人ケルナー (Theodor Körner, 1791-1813) がいる。ケルナーはプロイセンのリュッオー (Major von Lützow) の義勇軍に参加し、リュッオーの副官だった。ケルナーの「戦闘を前にした団結の歌 (Bundeslied vor der Schlacht)」の一節はこうである。副題は「Dannenbergの戦いの朝に」という。「我らが背後、夜の闇には/恥辱と怖気/ドイツの樅の木を倒した/外国の悪行がある/われらがドイツ語は恥かしめられ/教会は崩れ/われらが名誉は貶められている/ドイツの兄弟よ回復せよ! …… /われらが前にあるのは希望/黄金の未来/空は広く/自由の花は咲く/ドイツの芸術とドイツのリート/女性をたたえて愛の幸福/あらゆる偉大なものは再び来る/あらゆる美しいものは戻って来る/されどそのために振るうべきは蛮勇/生命も血も敵の堡壘へ打ち込め/犠牲の死のみがわれらに幸福をもたらす」²⁸⁾リュッオー部隊は1813年8月25日に北ドイツRatzburg近郊に配置され、部隊は夜営しながらケルナーの軍歌を合唱したという。歌の中には作られたばかりの「剣の歌 (Schwertlied)」もあった。そして翌8月26日の朝リュッオー部隊は敵部隊を攻撃した。馬上の「ケルナーは激しく突撃し」²⁹⁾、敵弾に倒れて戦死する。ケルナーが「団結の歌」で訴えているのは「突撃精神と犠牲的精神」に他ならない。最後の作品となった「剣の歌」は「作者の死2、3時間前に」という副題が付加されている。己の剣を花嫁と見立てるこの詩の最後は「花嫁よ歌え/きらめけよまぶしく/結婚の朝は来た/鉄の花嫁よ、万歳/万歳」³⁰⁾というものである。ケルナーの部隊には男装の女性プロハスカ (Eleonore Prochaska, 1785-1813) が変名で戦ったことでも知られており、「突撃精神」にあふれた部隊だったのである。またよく知られた諸国民戦争がライプツヒ近郊で戦われたのは同じ1813年10月16日から10月19日までである。「解放戦争においてドイツの詩人フケー (Fouqué) は『よろこばしき戦い、いざ立てよ』と歌い、詩人アルント (Arndt) の歌『ラッパは何を告げる、

騎兵出撃』ではドイツ騎兵の朗々とした突撃の喚声が響いている。しかし『豎琴と剣』のテオドーア・ケルナーほど戦いに熱狂した若者の気持ちをとらえたドイツ詩人はいない。」³¹⁾彼らはひとしく「突撃精神と犠牲的精神」を鼓舞した。プロイセンやドイツにも同じような伝統は存在していたのである。プロイセンがくヨーロッパのスパルタ>と呼ばれるには十分な理由があったのである。

(2)

1914年10月4日にはドイツの93名の作家、芸術家そして学者などが「文化世界に寄せる！(An die Kulturwelt!）」というアピールを発表する。「われわれドイツの学問と文化の代表はすべての文化世界を前にして、ドイツのやむをえない困難な存在のための戦い(Daseinkampf)というドイツだけの問題を汚そうとしている敵の嘘と中傷に対して抗議する。……これは真実を伝える女神なのである。……この戦争はドイツが原因だというのは真実ではない。国民も政府もカイザーも戦争は望まなかった。ドイツ側からすればそれを避けることは焦眉の急であった。その証拠は世界に明らかである。ヴィルヘルム2世がその26年間の統治の間、世界平和の守護神であったことは十分に証明されてきた。わが敵もこのことは十分に認識してきたのである。今ではなんとフン族アッテラのごとく呼ばれているわれわれのカイザーは、ながらくその平和を愛する不動のこころのゆえに嘲笑されてきたのである。……われわれがベルギーの中立を侵害したというのも真実ではない。フランスとイギリスがそれを侵そうと決定していたことは証拠がある。ベルギーがそれに同意していたことにも証拠がある。彼らに先んずなければ自己破壊となっていたであろう。あるひとりのベルギー市民の生命財産が、いささかの抵抗もなくしてわが国の兵士によって侵害されたというのは真実ではない。なぜならば再三にわたるあらゆる警告にもかかわらず、住民はわが国の兵士達を背後から撃ち、怪我人の身体を切断し、手当てにあたる医師を殺害したのである。……わが国の戦争のやりかたが国際法に背くというのは真実ではない。残虐行為は必ず処罰されている。しかし東部ではロシアの暴徒によって処刑された女子供の血が大地にしみ込んだ。そして西部ではダムダム弾がわが国の戦士の胸を貫いている。ロシア人とセルビア人と同盟して世界に対して恥ずべき光景をさらし、モンゴロイドと黒人を白人種にけしかける連中には、ヨーロッパ文明の擁護者を名乗ることはまったくゆるされないことである。わが国のいわゆる軍国主義に対する戦いはわが国の文化に対する戦いではないのだという敵の宣伝は真実ではない。ドイツに軍国主義がなかったならば、ドイツ文化はとっくに地上から抹殺されていたであろう。その擁護のために戦いがドイツ文化から生じてきたのである。例のないような一世紀にわたる略奪にさらされてきた国において。ドイツ軍とドイツ国民はひとつであ

る。……汝らに呼びかける。『信ぜよ！我々がこの戦争を終わりまで戦いぬくことを。ゲーテやベートーベンやカントのようなひとたちの遺産が家土地と同じく神聖である文化民族として。』³²⁾この呼びかけは「93人のマニフェスト (Manifest der 93)」とも呼ばれる。この呼びかけには Richard Dehmel, Rudolf Eucken, Herbert Eulenberg, Max Halbe, Gerhart Hauptmann, Andreas Heusler, Max Klinger, Max Planck, Wilhelm Röntgen, Hermann Sudermann, Wilhelm Windelband, Wilhelm Wundt など知られた作家、学者などが名前を連ねている。

新進作家アルノルト・ツヴァイク (Arnold Zweig, 1887–1968) も開戦に感激したひとりだった。彼は「新聞記事などから発想をえて、戦争に関連する短編をつぎつぎに雑誌……に掲載、それらは1914年中に短編集『野獣 (Die Bastie)』にまとめて出版された。アルベルト・ランゲン社の戦争シリーズの第3巻である。その表題となっている作品『野獣』はドイツ軍がベルギーに攻め込んだときの事件を扱い、農家に宿泊したドイツ兵がベルギーの農民に惨殺され、そのあとそれを見つけたドイツ士官がその農家を焼き払う話であるが、ベルギーの農夫が眠っているドイツ兵を殺し、死体を豚のように鉤でつるし、内臓を取り出して桶にぶちこむという残酷さを強調するとともに、それを見つけたドイツ士官がベルギーの農夫を『野獣』とよび、『報復』というより『抹殺』あるのみと考えるのを正当化する視点で書かれている。もともとこの素材となっているのは、ドイツ軍によるベルギーの中立侵害とそこでの残虐が国際的に非難されたのに対してドイツ側が原因はベルギーの農民の暴行にあるとして捏造した話なのだが、A. ツヴァイクはドイツ軍の発表を信じて排外主義宣伝の一翼をになったのだった。」³³⁾この作品もまた「93人のマニフェスト」を髣髴とさせるものがある。トーマス・マン (Thomas Mann, 1875–1955) の「魔の山 (Der Zauberberg)」(1924) が第一次大戦の勃発とともに終わることは知られている。しかしマンが1914年11月にベルリンの雑誌„Die neue Rundschau“に、「ドイツの勝利のみがヨーロッパの平和に貢献する」³⁴⁾という文章を発表したことはどうであろうか。この「戦時に思う (Gedanken im Krieg)」は1915年に出版されたが、全集に入るのは1974年のことである。そこには「我々はひどい窮状にある。そして我々はそれを歓迎する。なぜならば我々を高みに引き上げてくれるものがそれだからである。」³⁵⁾などというエルンスト・ユンガーばりの言葉がある。マンも含めたドイツの雰囲気認識される文章である。

このような風潮に異を唱えたのがヘッセ (Hermann Hesse, 1877–1962) である。ヘッセは1914年11月3日に„Neue Zürcher Zeitung“に「おお友よ、そんな調子ではなく (O Freunde, nicht diese Töne !)」という呼びかけを発表した。そのあとも平和を訴える論文を次々と発表して、〈売国奴〉とか〈卑怯者〉と呼ばれることになり、読者を失う。彼はスイスのドイツ兵捕虜のために援助活動に従事し、いくつものメルヘンを創作した。「おお 友よ」

には次のようにある。「私はドイツ人である。そしてドイツを思い、気持ちを寄せている。しかし今言おうとしていることは、戦争と政治には関係しないで、中立の者の立場と使命に係る。だからと言って政治的に中立な国民という意味ではない。研究者、教師、芸術家、文士として平和と人間性の仕事に携わるすべての人を意味しているのである。……ドイツ音楽がフランスでボイコットされ、ドイツでは敵性諸国の精神作品が同じくボイコットされた。非常に多くのドイツの新聞では将来、イギリス人、フランス人、ロシア人、日本人の作品がもはや翻訳されなくなり、目に入らなくなるという噂がある。それは噂ではなく、事実であり、すでに実施に移されている。こうしてすばらしい日本のメルヘン、よきフランスのロマン、それらはドイツ人によって戦争前には忠実にそして丁寧に訳されていたのに、今やまったく沈黙しなければならないのである。愛をこめてドイツ国民に提供されるすばらしい、よい贈り物は突き返されるのである。なぜならば日本の船がTsingtauを攻撃したからである。」³⁶⁾ヘッセはこれまでは人間性だの芸術に国境はないだのと崇高なことをいっていた人たちが、戦争を賛美するとは狂っている。文学者のなかでケルナーの愛国詩をゲーテの詩よりよいという人は少ないのに、ゲーテはドイツ精神を汚したといって単純な愛国者は非難する。ゲーテはドイツを愛していたが、しかし人間をもっと愛していた。平和こそ理想であり、人間文化は動物衝動から精神衝動への昇華によって成立する。愛は憎悪より、理解は怒りより、平和は戦争より上にある。ヘッセはこのように訴えたのであった。

ヘッセのいう「日本の船」が攻撃した「Tsingtau」とは中国の青島である。遼東半島の膠州（Kiautschou od. Kiautschau）の中心都市であり、当時のドイツの租借地（Pachtgebiet）だった。現代のドイツの百科事典「 Brockhaus」(18.Aufl.,1993) は以下のように説明している。「州の東部、山東半島の南部の都市。黄海の膠州湾への入り口で、崂山のふもとにある。1989年で204万人。山東州の最重要な工業と貿易の中心。山東大学(1926創立)、工科大学、海洋大学、医科大学および多くの研究所並びに海洋博物館がある。カトリック司教所在地。工業はとくに1938年－45年の日本の占領下そして1950年以降に勃興した。綿加工（中国で2番目）と汽車と自動車生産、鋼鉄精錬、自動車タイヤ、染料生産、食物生産、紙工場、セメント工業、塩生産。中心街から約4キロの島のHuang Dao区には15平方キロの工業地域の経済特別区がある。青島は中国で最良の深海港のひとつを有し、鉄道で後背地の煙台（Yantai）とJinanと結ばれている。漁港もある。— 青島は1891年の堡塁建設までは小さな漁村だったが、1898年にドイツ租借地になり、多くの世紀末様式の立派な建築物がある欧風の特徴の大都市に発展した。（執政官邸宅とカトリック教会）」ドイツ帝国による青島経営についてはわずかの言及であり、青島をめぐる日独攻防戦についてはまったく言及がない。時代の経過が感じられる。

第一次大戦は1919年（大正8）6月のヴェルサイユ条約によって終わるが、青島を中心と

する日本軍とドイツ軍の戦いはすでに1914年11月7日におわっていた。ドイツ側は弾薬が尽きたのであった。11月7日の夜の交渉の末ドイツ軍は青島開城規約書に調印し、降伏した。兵営・建築物・鉄道・軍需品等はすべて無条件に日本側に現状引渡しとされた。

ヴェルサイユ条約第156条の内容は日本に対するドイツの膠州地域、鉄道、鉱山そして海底ケーブルに関する一切の権利や要求の放棄である。これらはドイツと中国の間で1898年3月6日に締結された条約及び山東州に関する協定によって獲得されたものであるとある。第157条はドイツ語文ではこうである。„Das dem deutschen Staat gehörige bewegliche und unbewegliche Eigentum im Gebiet von Kiautschau sowie alle Ansprüche, die Deutschland infolge von ausgeführten Arbeiten oder Verbesserungen oder Ausgaben erheben könnte, die es mittelbar oder unmittelbar für dies Gebiet gemacht hat, gehen frei von allen Lasten an Japan über.“ その日本語訳は以下である。「膠州湾地域内ニ於ケル独逸国有ノ動産及不動産並該当地域ニ関シ独逸国力直接又ハ間接ニ施設若ハ改良ヲ為シ又ハ費用ヲ負担シタル為其ノ主張シ得ヘキ一切ノ権利ハ無償且無条件ニテ日本国之ヲ取得保持ス」(外務省「同盟及連合国ト独逸国トノ平和条約並議定書 附波蘭国ニ関スル条約」1919年、大正8年、11月)³⁷⁾これによって「日本は旧ドイツ官有財産の保有権を得た。したがって、……膠州図書館所蔵の図書ならびにドイツの総督府を始めとする旧ドイツ官庁所蔵の図書および図面は、日本のものと見なされた。」³⁸⁾「膠州図書館とは、ドイツ軍の兵士・将校用の図書館(Kiautschou-Bibliothek)のことである。青島陥落後そこに残されていた約1万冊の書籍も、他の書籍・文書ともども日本軍に鹵獲され、(捕虜より)一足遅れで日本に送られることになるのである。」

書籍類についてはドイツ側に「膠州図書館蔵書目録(Bücherverzeichnis der Kiautschou-Bibliothek)」がすでに存在していた。日本側は「鹵獲書籍及図面目録」そして「膠州図書館蔵書(洋書)追加目録」を作製した。これらの目録は国内の大学などの各機関に送付されて、鹵獲書籍等の配分希望がとられた。そして山形大学図書館には「鹵獲書籍及図面目録」が存在する。その表紙には、右から縦書きで、「大正九年二月」、「鹵獲書籍及図面目録」そして「青島守備軍陸軍参謀部」と墨で銘記されている。「目録」の最初の方に「山形高等学校蔵書印」が押されてある。ヴェルサイユ条約は1919年(大正8)6月28日に調印され、1920年(大正9)1月10日に発効している。上記目録の「二月」は条約発効を意識したものとなっている。日本は四国の坂東捕虜収容所など各地に設置した収容所でドイツ兵捕虜の待遇にも国際法を十分配慮したとされるが、その姿勢は鹵獲書籍分配についての日付からも裏付けられる。青島攻略後に日独間で結ばれた開城規約書における権利の行使を控えていたと思われるからである。

山形大学図書館蔵の「鹵獲書籍及図面目録」は厚さ6センチの手書きの謄写版造りである。

鹵獲書籍と図面の総数は「31,393点；内訳：洋書・漢籍合わせて26,260冊，図面は5,133葉」³⁹⁾であるという。日本は青島の占領後に守備隊「青島守備軍」を置いた。この青島守備軍司令官は初代から5代まで任命され，初代は神尾光臣中将だった。攻城司令官からそのままの転任だった。1915年（大正4）までの在任となる。（神尾司令官の次女安子は明治42年3月に作家有島武郎と結婚していた。安子は大正6年12月に27歳で3人の子供を残して病死する。）大正9年当時の守備軍司令官は由比光衛である。第5代で最後の青島守備軍司令官となる由比中将は大正8年5月から大正11年12月までつとめ，在任中に大将となる。由比司令官のもとに「鹵獲書籍及図面目録」が完成されたと考えられる。

この「目録」の冒頭には以下の説明がなされている。「目録」はすべて手書きである。

一、鹵獲書籍ノ種類及員数左ノ如シ

（一）官有書籍（独逸官庁ノ蔵書ヲ集メタルモノ）

洋書	二、八〇七部	八、六三四冊
漢書	八一部	一、四七七冊

（二）徳華高等学堂蔵書

洋書	六四四部	一、二九四冊
漢書	一、六八三部	五、〇五八冊

（三）ウィルヘルム・コーン叢書（コーント称スル学者ガ独逸総督ニ寄付シタル支那ニ関スル書籍）

洋書	二七二部	三二四冊
----	------	------

（四）膠州図書館蔵書

洋書	七、五六三部	九、四七三冊
漢書	一一、五三〇部	二六、二六〇冊

二、又鹵獲図面ノ員数左ノ如シ

図面	五、一三三葉
----	--------

三、膠州図書館蔵書目録ハ独文印刷ノモノ存在セルヲ以テ本目録ニ追加目録（二一九部二四三冊）ヲ記載スルニ止メタリ

四、本目録ニ記載セル支那其他東洋ニ関スル書籍（洋書）「目録」ハ前掲ノ官有洋書ヨリ支那及東洋ニ関スルモノノミ抜粋シテ閲覧ノ便ヲ図リタルニ過ギズ

五、官有書籍（洋書）目録中四七頁ヨリ五六頁迄及一三三頁ヲ欠クハ頁数ノ記入ヲ誤リタルモノニシテ内容ニ欠漏アルニハアラズ

上記「三」でいわれている「独文印刷」の「膠州図書館蔵書目録」とは „Bücherverzeichnis

der Kiautschou-Bibliothek“を指すが、山形大学図書館では未発見である。徳華高等学堂とは青島に創設されていたDeutsch-Chinesische Hochschuleすなわち独中大学のことである。また膠州（Kiautschou）図書館とは「ドイツ軍の兵士・将校用の図書館である」⁴⁰⁾という。山形高等学校に対して青島守備軍参謀（部）から寄贈された鹵獲図書のほとんどは、この膠州図書館の蔵書だったと考えられる。

山形大学に存する鹵獲書籍の表紙裏にはドイツ側図書館のラベルが貼付されている。縦8センチ7ミリ、横7センチ6ミリの用紙である。その面積の半分以上を占めて三重の円形スタンプが押されてある。円の最大直径は4センチ5ミリである。三重の円の中には雲を背景に洋上を往く帆船の絵が描かれてある。三本マストである。この絵もまた円形をなしている。いうならば四重の円が形成されているといつてよいだろう。三本目とこの最後の円の間には „* DEUTSCHE WEHR, DEUTSCHE EHR * AUF LAND UND MEER“ すなわち「独逸国防軍、独逸の名誉；海と陸で」と円を一周する形で書かれている。紙片の上から6センチのところには „KIAUTSCHOU BIBLIOTHEK“ すなわち「膠州図書館」と印刷されている。その下には2行で „Abt: Gr: “, „Ord.Nr: “ と印刷され、空白部分には手書きで記入される。たとえばキューン（Franz Kühn）の「ドイツの誠実（Deutsche Treue）」という本の表紙裏には, „Abt: X II Gr: D.“, „Ord.Nr: 52252“ と記入されている。前半は図書の分類に関わり、後半は図書館における登録番号であると考えられるが、なお検討が必要である。（この本については „Gr: D“ と „Ord.Nr: 52252“ は交錯する何本もの鉛筆の線で乱暴に消され、それに続く1ページ目に「X II, D.」「57027b」と鉛筆で、やはり丁寧ではない筆跡で記入されている）また表題紙（中表紙）には横に楕円形のスタンプが押されているのがほとんどである。上に „Kiautschou-Bibilotheek“ すなわち「膠州図書館」、下に „Tsingtau“ すなわち「青島」と印刷されてある。その真ん中部分にたとえば「X II D 57027b」と書きこまれてあるが、空白のままのものも少なくない。

またこれらの鹵獲書籍が属していたと思われる「第3海兵大隊第1中隊」のスタンプがあるものもある。すなわち „I. Kompagnie/ III. Seebataillon“ というスタンプである。それは以下の本である。（番号についてはのちにも説明するが、筆者が山形大学図書館でその所在を確認してそれぞれの本につけた整理番号である。）

1, 29, 38, 41, 80, 89, 97, 100,

このうち「29」「38」「80」「89」「97」「100」にはKiautschou-Bibliothek（膠州図書館）の所属を示すものはない。「鹵獲書籍及図面目録」いうところの「官有書籍」の可能性がある。「41」の場合は „OSTAS.BESATZUNG.S …“（S以下判読困難）とか „SHANGHAI“ のスタンプを読むことができる。「上海」の「東アジア占領（軍）」と読むのかもしれないが、な

お検討が必要である。

(3)

大正期に誕生した多くの高等学校にとって洋書の必要度は極めて高かったであろうことは容易に想像される。この間の事情については志村論文に詳しい。それによれば、1922年（大正11）4月5日付けの東亜同文会会長牧野伸顕の陸軍大臣山梨半造宛の「鹵獲文書の分配依頼書」⁴¹⁾や5月19日付けの東北帝国大学総長小川正孝の陸軍大臣宛の書籍分配の「希望一覧」があり、また同年9月13日付けの牧野の「書籍928冊と目録2部に対する礼状が送られている。」という。大正9年（1920年11月19日）2月に作成された「鹵獲書籍及図面目録」などはすみやかに各地に送付され、それを受けて各送付先から配分希望が提出されたと考えられる。陸軍は「各地の希望を勘案し、慎重に『鹵獲書籍寄贈分配表』を作成した。」⁴²⁾とされるが、希望が重複した場合の措置など、配分の具体的な事情は不明である。

大正8年（1919）に開校された松山高等学校の初代校長由比質は大正9年7月9日付けで「実ハ当校の如きハ昨年創立され参考図書整備ニハ非常ニ苦心致居候場合ニ有之候間若し何等かの方法にて右様の事可相願ハれ候ハ、誠ニ本校のために幸慶ニ存ジ候次就てハ試みニ請願書提出致候間御多用中甚た恐縮なから何分の御詮議被下度奉悃願候」⁴³⁾という請願書を提出した。この結果松山高等学校には計523冊の書籍が配分される。由比校長は青島守備軍由比司令官の弟だった。東亜同文会や東北帝国大学と同列で配分されたのか、それとも遅れたのか興味深い。山形高等学校は大正9年（1920）10月5日に開校された。前年の新潟、松本、松山高等学校の開校を受けて、地元による多額の寄付などによる運動の結果とされる。大正9年4月に設立決定が官報に発表され、7月に入学試験、8月2日合格発表、そして9月4日入学式というあわただしさであった。（松山高等学校の入学式も9月11日である。）これより先、初代校長三輪田輪三のもと人事がすすめられ、英文学者の島村盛助やヘッベル研究などで知られる独文学者の吹田順助などが教授に任命された。吹田は札幌時代に有島武郎と親交があり、明治42年（1909）1月には札幌の北二条の有島の家にも同居もしている。これは有島の結婚直前のことになる。ふたりは東北帝国大学農科大学（札幌）の予科教授で、有島は英語担当だった。山形高等学校の第1回入学試験に首席で合格したのは、山形県小松町出身で、のちに独和辞書「独和言林」を編むことになる佐藤通次である。受験については独学であったという。ドイツ語教授陣には若手の奥津彦重もいた。また開校3年目の大正11年には法制経済とドイツ語教授として岡本信二郎が赴任している。吹田順助はドイツ出張中だった。岡本はのち山形高等学校の名物教授となる。関東大震災が起こった大正12年4月には第4回生として函館出身の亀井勝一郎や永井荷風縁戚の坂本越郎が入学している。（詩人で独文学者

となる坂本越郎は今も伝わる寮歌「ああ乾坤」の作詞者である)

山形大学図書館に残る「洋書登録台帳」によれば、山形高等学校における洋書登録の「登録番号」の「1」は„Takenobu’s Japanese-English Dictionary“すなわち「武信和英辞典」(第31版, 1920, 定価6円)である。大正9年(1920)8月16日登録である。第1回入学生の合格発表後まもなくの登録ということになる。またドイツ語の洋書登録の第1号はハインリッヒ・マン(Heinrich Mann)の「あきれた教授(Professor Unrath oder das Ende eines Tyrannen)」(1905, Kurt Wolff Verlag, Leipzig)と思われるが、受入年月日の記載はない。丸善の納入で、小説全集の第6巻と知られる。(この小説はドイツ映画「嘆きの天使」原作となる)第2号はリヒャルト・ワーグナー(Richard Wagner)の「パリのドイツ人マイスター(Ein deutscher Meister in Paris)」(Insel)で、大正10年(1921)6月27日受け入れである。大正10年12月23日現在で、山形高等学校の所有洋書は1153冊でしかない。翌年の大正11年12月27日で2379冊である。そして大正12年12月8日で2790冊である。鹵獲書籍が松山高等学校なみに配分された場合洋書の蔵書は格段に増加したはずである。ドイツ語洋書に限るならば特段の充実となったはずである。しかし山形高等学校は遅れをとったかもしれない。なにぶん当時としては僻遠の地である。旧制二校との対抗戦などでは仙台に福島回りで遠征した時代である。松山高等学校ならばすでに同じ四国に坂東収容所が開設されていたから、情報面では有利だったことが考えられる。大正8年設立の新潟、松本、山口、松山については初めの分配計画に掲載されているという。⁴⁴⁾初めの分配計画に遅れて、「水戸、山形、佐賀高等学校に対しても他の高等学校と同程度分配すること」⁴⁵⁾になったという。この3つの学校は同じ大正9年の創立である。そして「他の高等学校と同程度分配」であるならば、山形高等学校にも松山高等学校の523冊や新潟高等学校の489冊のように、500冊前後の書籍が配分されたはずである。しかし冒頭で述べたように、山形大学で確認された数は108冊でしかない。従来の11冊説よりは格段に多いが、しかし多くの鹵獲図書の所在あるいは行方は不明ということになる。また実際に鹵獲書籍が配分された年月日も含め、分配の具体的な事実も不明である。しかし108冊とはいいいながら、よくこれだけ残っていたという思いもする。これらの図書は旧制高等学校時代の他の書物とともにながらく山形高等学校創設以来の通称「赤レンガ書庫」に所蔵されていたようである。筆者は別の用件で幾度か入庫したことがある。入庫するためには係から借りた大きな鍵で、これもまた大きくて重たい錠を開けるのである。書庫内は裸電球一つ程度の照明で暗く、書棚同士の間隔も狭く、目的の本を探すのは楽ではなかった。カビの匂い充満である。この書庫は近年取り壊され、新しい5階建ての書庫に建て替えられた。

山形大学図書館には山形高等学校時代の資料として「寄贈書籍台帳」「洋書登録台帳」「洋

書分類台帳」そして「(洋書) 図書出納簿」が残る。いずれの台帳にも青島鹵獲書籍に関する記載がある。もっとも詳しいのは「寄贈書籍台帳」である。それによれば山形高等学校に対する寄贈書籍の第1号に関する記載は以下ようになる。

(寄贈月日) 大正九年三月二十八日 , (受入番号) 1, (著者又は編者) 内閣書記官室記録係 , (書名) 大札記録, (発行所) (記入なし), (冊数) 1, (定価又は見積価格) 10,000, (寄贈者; 住所氏名) 同課長 下條康喜, (礼状発送年月日) (記入なし), (登録番号) 309, (備考) (記入なし)

これは官報に学校設立が公表される以前の日付である。

寄贈された本は洋和漢書を問わずに、年月日順に几帳面な字で記載されてある。それが「寄贈書籍台帳」である。そして昭和22年(1946) 6月9日に次の2冊の本について以下のような記載がある。青島鹵獲書籍では初めての記載である。

(受入番号) 1914, (著者又は編者) ブラウンハーバー, (書名) ダス

ダウツェ ツァイチウンズ ウエズエン, (発行所) goschmsche verlagshandlung

(冊数) 1, (定価又は見積価格) 15,000, (寄贈者) 青島守備軍参謀部, (登録番号) 6567

(受入番号) 1915-1917, (著者又は編者) ブラウン シュライヤー , (書名) マツヒーズ
ワルツ 1・2・3 (発行所) verlag, (冊数) 3, (定価又は見積価格) 75,000, (寄贈者)
青島守備軍参謀部, (登録番号) 6561-6563

受入番号第1914はBraunhaber: „Das Zeitungswesen“, 第1915-1917はBraun Schleier: „Mädchens Walz“ とでも書くのであろうか。それならば「新聞の本質」と「少女のワルツ」と訳すことができる。この4冊の鹵獲書籍についてはいずれも今のところ所在を確認できていない。奇異に思われるのは「寄贈者」が「青島守備軍参謀部」となっていることである。青島守備軍はすでに大正11年(1922) 11月に廃止され、日本軍は青島を去っている。守備軍廃止後20年以上、すでに消滅した組織からの寄贈ということになる。

昭和22年6月23日に二度目の「青島守備軍参謀部」寄贈書籍の記載が「寄贈書籍台帳」においてなされている。受入番号「1920」から「1941/1942」15部17冊である。この中では今のところ3部4冊しか確認できない。確認されたのは以下である。

1920 : „Deutscher Literatur Katalog 1910-1911“, F. Volkmar und L. Staatsmann (登録番号6567)

1931 : Lee, H. „Die Radlerin“ (登録番号6577)

この本には「344/ 26」という山形大学図書館の請求記号がある。本の背にこの請求記号のラベル(通称背ラベル)が貼付されている。

1941/1942 : „Deutscher Literatur Katalog 1912–1913 1913–1914“, 2冊

F. Volkmar und L. Staatsmann (登録番号6568/6569)

以上の4冊中、レー (Lee) の小説以外は書籍目録である。目録についてはドイツ側の所属先は不明である。

以下において山形大学図書館で存在が確認された青島鹵獲書籍について注において「1」からの番号をもって、著者や書籍名などをかかげる。「注」の後の部分にこのリストはおかれる。カタログは「0–1」以下の番号をつける。レーの小説「女自転車教師」が「1」となる。山形大学図書館の請求記号の順序に従っている。「1」を例とすると次のような表記になる。

「1」(344/ /26;6577) Lee, Heinrich: „Die Radlerin“, Roman, Leipzig, Druck und Verlag von Carl Duncker, 1887 (レー「女自転車教師」)

「344/ /26」とは山形大学図書館におけるこの本の請求記号である。本の背中に貼付されたラベルによっている。また表題紙には、横にした楕円形の中に「山形高等学校/受入/第6577号/昭和22. 6. 23/図書課」とスタンプがなされている。「受入」の字のみ、縦書きで、「第6577号」と「昭和22. 6. 23」の2段を「受」と「入」ではさんでいる。鹵獲書籍はおおむねこの様式となっている。⁴⁶⁾

鹵獲書籍リストを寄贈年月日順に整理すると以下ようになる。繰り返しになるが、いずれも現時点で山形大学図書館において所在が確認されたものについてだけである。

○昭和22年6月23日「青島守備軍参謀部」寄贈

0–2, 0–3, 0–4, 1

○昭和23年2月21日には「青島守備軍参謀 (部は欠如)」から寄贈番号「2106」のTolstoi „Auferstehung“ (Reclam jun.) I, 「登録番号6791」以下23冊, 計24冊寄贈の記載がある。それは整理番号では以下ようになる。

2, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17,
18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26

(「3」は昭和23年6月1日寄贈である)

○昭和23年3月20日には「寄贈番号2578」以下計47冊が「青島守備軍参謀」から寄贈さ

れている。「2578」はWeitbrecht,R.: „Der Kopf des Apostels“である。「登録番号7030」であるが、他の本については「外46冊」としか記載されていない。個々の書名はない。「定価又は見積価格」は「1650000」である。「寄贈番号7076」の1冊を除いた46冊は現存している。すなわち受入番号7030から受入番号7075までは所在が確認できた。

27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44,
45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62,
63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72

○昭和23年6月1日には「青島守備軍参謀」から以下9冊の寄贈があったことが、本自体における記入から知られる。しかし「寄贈書籍台帳」にその記入は見当たらない。

3, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80

○昭和23年9月22日には「青島守備軍参謀」から「寄贈番号2600」Wenchstern” Philosophy of the Empire) (大日本書史 式)” (maruzen) (登録番号7243) 以下7冊の寄贈があったが、確認できたのは3冊である。

81, 82, 83

○昭和23年9月25日には「青島守備軍参謀」から「寄贈番号2615」の商務印書館「德国六法」(登録番号 不鮮明) 以下30冊以上の寄贈の記載がある。「寄贈番号2616」Savage,R.H. “Die Hexe von Harlem”と「登録番号7252」から「登録番号7267」までは確認できたが、しかし「寄贈番号2632」Würstemberg, „Deutsches Lesebuch für gegliederte Volksschulen“ (Leipzig) (「国民学校国語読本」)(「登録番号7270」) 以下16部、19冊は1冊以外は確認できなかった。青島鹵獲書籍かどうか不明である。小説と旅行記、ドイツ語教科書や法律書である。たとえば「寄贈番号 2651」のWagner,R. „Handbuch des Seerechts“ (Leipzig) (「海洋法ハンドブック」) である。また19冊中の確認できた1冊とは「93」の青少年向けの小説である。

84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99

○昭和23年10月19日には「青島陸軍参謀」から「寄贈番号2698」から「寄贈番号2704」までの4部6冊と、「寄贈番号2707」一冊の寄贈がある。「寄贈番号2701」はSchlegel: „William Shakespeare’s Sämtliche Dramatische Werke“ (Leipzig) (シュレーゲル「シェークスピア全集」) である。また「寄贈番号2707」は「青島守備軍民政部鉄道部編」の「山東風景写真帖」(博文館) である。いずれも所在は不明である。

- 昭和23年10月26日にも「青島守備軍参謀」から「寄贈番号2726」から「寄贈番号2730」までの4部5冊の寄贈の記載がある。「寄贈番号2726」は„Deutscher Lietartur-Katalog 1909–1910“である。「寄贈番号2729–2730」はKohler,J „Zeitschrift für Volksrecht und Bundesstaatsrecht“(「民族法及連邦国家法雑誌」) Bd.1,3, 「登録番号7311–7312」である。„Deutscher Lietartur- Katalog“以外の所在は不明である。

0 – 5

- 昭和23年12月13日には「寄贈番号2817」から「寄贈番号2812」まで6冊の寄贈が「青島守備軍」からなされている。「寄贈書籍台帳」における青島関係の記載の最後である。このうち所在が確認できたのは „Instruktionen für die alphabetischen Kataloge der Preuzischen Bibliotheken“ (Berlin) と Sommerfeld の „Das Geheimnis der Kamorra“ である。また「目録」には „Bibliothek der Deutsch-Chin. Hochschule/ /TSINGTAU“ すなわち「徳華大学 青島」のスタンプがある。山形大学図書館の鹵獲書籍の中で、青島徳華高等学堂すなわち青島独中大学所属の書籍であることが確認できるのはこの1冊だけである。

0 – 1, 100

- 昭和24年2月16日には3冊の青島関係と思われる本の登録がなされている。「寄贈書籍台帳」に記載はないが、本の表紙裏に Kiautschou Bibliothek (膠州図書館) の記入があるので、鹵獲書籍と判断される。

101, 102, 103

山形高等学校の「寄贈台帳」には「吹田順助(本校教授)」や「三輪田輪三(本校校長)」からの寄贈や、「道家忠道(前本校教授)」などの記載があって興味深い。(道家忠道は独文学者で、山形高等学校教授だった) 昭和23年2月12日には「山高学期同」すなわち「山形高等学校大学昇格期成同盟会」から多くの書籍の寄贈があったり、昭和23年3月6日には”Shakespeare.Twenty-three Plays and the Sonnets” 他166冊の本が「米国軍」すなわち進駐軍から寄贈されたりしている。

山形大学の場合は鹵獲図書の図書館登録の年月日は昭和に入ってからである。しかも存在が確認された中でもっとも早いもので昭和22年(1947)6月23日であり、もっともおそいものは昭和24年2月16日である。そしてもっとも多いのは昭和23年3月20日である。この年月

日は書籍の「受入」欄のスタンプによって確認されるのである。しかし大正時代の鹵獲図書の分配が昭和22年や昭和24年まで手間取ったとは考えにくい。山形高等学校に対しても松山高等学校から少し遅れただけで配分されたと考えるのが自然ではないだろうか。東北帝国大学からは大正11年9月に陸軍省に対して礼状が送られている。山形高等学校において登録が25年以上も遅れたように見える理由は不明である。山形高等学校が国立学校設置法によって山形大学文理学部となったのは昭和24年(1949)5月である。鹵獲図書の図書館登録作業が、この国立大学化の一環としてなされたであろうことは想像できる。昭和23年2月12日における「山高大学昇格期同」からの寄贈もその一環であろう。しかし25年以上経過してからの鹵獲図書登録の意味や理由、ばらばらの受け入れ年月日などは今後の解明の課題である。登録が遅延しただけであるならば、その理由や登録までの所在が不明である。寄贈者が「青島守備軍参謀部」であったり、「青島守備軍参謀」であったりする用語の不統一についても同様である。行方不明と推定される鹵獲書籍についても今後の解明が必要である。

(4)

鹵獲図書の分配では中央において基本方針が立てられた。「高等学校には文学作品を中心とした一般教養に向いた書籍、また高等教育機関はその設置目的に適した研究書や実用書、さらに広範な分野の書籍が分配」⁴⁷⁾される計画であったという。以下においては山形高等学校に分配され、山形大学図書館に現存する鹵獲図書を中心にその事情を分析する。

ドイツ帝国の海軍はベルリンに本部があって、キールの第1海兵大隊、ヴィルヘルムスハーフェンの第2海兵大隊（ちなみに映画「サウンド・オブ・ミュージック」の主人公のひとりトラップ大佐はオーストリア海軍所属である。ブレーマーハーフェンに出征することになっていた。）クックスハーフェンの第3海兵基幹大隊（Stamm-Seebataillon）そして青島の第3海兵大隊（III.Seebataillon）などからなっていた。青島には膠州総督府（Gouvernement）がおかれ、総督（Gouverneur）は「閣下（Exzellenz）」の称号で呼ばれた。軍事と民政の責任者であった。ちなみに第一次大戦時の総督はマイヤー＝ヴァルデック（Alfred Meyer-Waldeck, 1864－1928）海軍大佐（Kapitän zur See）である。6名の総督は全員が海軍大佐であるが、日本の守備隊の司令官5名中ひとりが中將であることを除いて全員は大將であったことと対照的である。青島の第3海兵大隊は5つの中隊（Kompagnie）と1つの海軍野砲中隊（Marinefeldbatterie）、1つの海軍工兵中隊（Marinepionierkompagnie）からなっていた。他に水兵砲科部隊（Matrosenartillerieabteilung）もおかれていた。⁴⁸⁾ 別の資料によればさらに東アジア海軍支部（Marinedetachement）が北京と並んで青島におかれていた。青島にはそのほか港湾役所や防疫所が設けられていた。⁴⁹⁾ 第一次大戦開始をもって、青島の

ドイツ軍は大幅に増強された。

この第3海兵大隊には「青島の飛行士」⁵⁰⁾と称されプルショ大尉 (Gunther Plüschow; 1886—1931) が1914年7月ドイツから赴任し、偵察飛行や日本軍爆撃をしていた。第一次大戦は初めて飛行機が戦争に使用されたことでも知られる。1914年11月6日降伏もやむをえない状況になって、大尉は「秘密資料と第3海兵大隊旗の黄金の先端を護持すること」を命じられて「激しい射撃の中」海州に脱出し、飛行機を破壊し、敵国イギリスのスコットランドヤードに追われながら上海の大使に書類を渡すことに成功したあと、「長崎、ホノルル、サン・フランシスコそしてニューヨークを経由して」母国に帰還したという。ゴットベルクの「青島の英雄達」にはプルショ大尉の飛行機と日本軍の4機の飛行機の空中戦の描写がある。大尉は捕虜にはならなかったわけであるが、日本軍の捕虜となった4千人以上の捕虜のなかにはワンダーフォーゲル運動の創始者フィッシャー (Karl Fischer) や戦後日本にすみついてドイツ菓子店を始めることになるユーハイム (Carl Juchheim) などがいた。日本は捕虜についてヨーロッパ文明吸収のよい機会ととらえたのである。ベートーベンの「第9交響曲」が四国の坂東収容所で日本で初めて演奏されたこともよく知られている。このような個々のドイツ兵については瀬戸の詳細な研究が進行中である。⁵¹⁾

資料によれば青島のドイツ人の様子は次のようである。「ドイツ人一般住民と並んで……軍隊が青島最大のドイツ人住民だった。軍務は志願制だった。駐屯兵の半分は年毎に交代させられた。膠州海軍はクックスハーフェンの第3海兵大隊と水兵砲科部隊からの兵士だった。青島の総督の下に水兵砲科4中隊 (Kompanie Matrosenartillerie), 4歩兵中隊 (Kompanien Infanterie), 1騎兵中隊 (1 Kompanie berittene Infanterie,) 1工兵中隊 (Pionierkompanie) そして海軍本部 (Marineverwaltung) があった。その他に海軍役所、港湾役所そして防疫所で海軍役人が勤務していた。兵士は中心街の外側にある3つの兵営に収容されていた。」⁵²⁾という。平時には2千人以上の兵力があったと思われる。「志願制」については1900年初めクックスハーフェン近くの町の「オテルンドルフ週刊新聞 (Otterndorfer Wochenblatt)」に次のような公示がなされたという。「今年秋に海軍大隊の3年志願兵募集がなされる。多数である。志願兵は身体強健、最低160センチ以上、視力優秀であること。1901年そうそうに膠州に派遣される故、志願者は熱帯勤務可能であることが求められる。」⁵³⁾青島の海軍大隊はすでに1892年12月3日に設立されていたから、これは青島の兵力増強が目的と考えられる。元来存在していたクックスハーフェンの第3海兵大隊が第3海兵基幹大隊と呼ばれるようになったのはこのような理由からと考えられる。クックスハーフェンに集められた志願兵たちは、<青島兵営 (Tsingtau-Kaserne)>という名称の新しい兵営に収容された。それには練兵館と下士官用住宅も付設していた。下士官住宅は青島通り (Tsingtau-Straße) にあったという。それは今日のHermann=Allmers-Straßeである。

ドイツは青島経営に力をいれた。志願兵の募集もその一端である。1909年には青島独中大学（Deutsch-Chinesische Hochschule Tsingtau）が設立された。それは中国によっても高等教育機関として認可されたという。⁵⁴⁾「徳華高等学堂」がそれである。この学堂は1907年の上海ドイツ医科大学（Deutsche Medizinschule Shanghai）創立に続くものであった。ドイツ帝国文部省の大学局で国内外の教育機関や図書館整備に辣腕をふるったのはプロイセンの文部官僚アルトホーフ（Friedrich Theodor Althoff; 1839–1908）だった。青島独中大学の教員のひとりとしては中国人英語教師Dr. Yu Tsunの名前が残っている。ドイツ人教員としては天文学者マイヤーマン（Brunno Meyermann）、数学者クノッ（Konrad Knopp）、物理学者でマックス・プランクの高弟フプカ（Erich Hupka）、植物学者ヴァーグナー（Wilhelm Wagner）などがいた。1912年10月に孫文が訪問した時には中国人学生に対して、「ドイツを中国のナショナルな近代化のモデル」⁵⁵⁾として推奨したほどだった。青島には1889年に総督学校（Gouvernementsschule）が創立されていて、東アジアのドイツ人子弟を受け入れていた。これは1902年に高等学校（höhere Schule）へと格上げされていた。1913年には227名の生徒がいた。この学校は改良実科ギムナジウム（Reformrealgymnasium）相当であった。独中大学（徳華高等学堂）に図書館が設けられていたほかに、ドイツ兵のためにはKiautschou Bibliothek（膠州図書館）がもうけられた。蔵書は2万冊とされる。膠州図書館は「兵士に読み物を供する」⁵⁶⁾目的をもって、「ドイツ系住民の寄付」によって設立された。この図書館は青島の中国人住民にも開放されていた。その他の教育機関もあって、青島は「中国におけるドイツの学問センター」となっていたのである。その青島から多数の鹵獲書籍が日本に運ばれたのである。

青島のドイツ軍図書館である膠州図書館（Kiautschou Bibliothek）は蔵書が2万冊とされるから、図書館というよりは図書室と呼ばれるべきものだったかもしれない。ドイツ側は山形大学の鹵獲書籍で見ると本において登録年月日の記載はしてない。従ってこれらの本のドイツ側における登録年月日は不明である。しかし青島の租借が早期に終了するとは予期してはいなかったであろうことは、大学創立などの事実から知られる。2万冊とは蔵書の出発点だったと考えられる。ドイツ軍は図書館を設けて整備し、将校だけでなく、一般兵士にも読書の機会と場所を提供していたことになる。1914年当時青島のドイツ兵には読書の機会が与えられていたらしいのである。では日本軍の場合はどうだろうか。

それは非常に貧困だったのではないか。まず一般兵士が兵営内で本を読むことは不可能に近かったのではないか。もっぱら昭和時代の話になるが、戦記・軍隊ものの書籍において一般兵士が自由に読書しているという記述を読んだ記憶はない。内務班生活が克明に描かれた野間宏「真空地帯」にも読書場面はないはずである。阿川弘之「雲の墓標」には「家より斎藤茂吉『寒雲』と、岩波文庫のチェホフの短編集をおくって来てくれた。」⁵⁷⁾という一節があ

るが、これは東大学生出の幹部候補生の故の特別待遇とみるべきであろう。鹿児島県出水の海軍航空隊という事情もあるかもしれない。「きけわだつみのこえ」(岩波文庫)は日本の戦没学生の手記である。読書の記事は散見できるが、しかしもっとも多いのは第一次大戦の「ドイツ戦没学生の手紙」(岩波新書)である。「戦没農民兵士の手紙」(岩波新書、1961年)に読書の記述はない。別の手記でも事情は同じである。宮城県塗装業だった森伊佐雄は昭和18年1月に仙台で入営した。その「新兵日記」の昭和18年1月27日の日記によれば「もう入隊してから半月にもなる。私たち新兵にはきょうが何日で、何曜日だか、何時だか、かいてもわからない。時間の観念がまるっきりなくなっている。……軍隊の一日は起床ラッパにはじまって消灯ラッパにおわる。」⁵⁸⁾一日が過酷な日程からなっていて、「新兵には自分のための時間というものはない」とある。日記を書く時間くらいしか与えられなかった。そもそも兵営には図書館という建物は存在しなかった。わずかに将校集会所に図書室が存在しただけである。これは昭和時代の日本各地の連隊の兵営の配置図から確認される。将校集会所の図書室にはいくばくかの書籍は存在したであろうが、しかし一般兵士には閉ざされてあった。一般兵士が読むことをゆるされた本は上から供与される本だけだったと想像される。「きけわだつみのこえ」では軍医の大島欣二は自由に読書していたらしいことが知られるが、それは軍医という立場の故であろう。加賀乙彦「帰らざる夏」には「その頃毎日ぼくは独りで外出していた。……今だから言うが、禁制の本を読みに行ったのさ。禁制といっても大した本ではなく、堀川軍医から借りた文学書だ。……あの人は書痴でね、軍医なんて暇なもんだから校内にも随分書物を持ち込んでいる。それが生徒に禁書だとはあの人は知らない。」⁵⁹⁾この小説の舞台は昭和20年ころの幼年学校である。軍隊の内側で自由な読書はできなかったことがうかがわれる。また会津の連隊にかかわる回想に「当時兵営には図書室などなく、活字に飢えと病院に潜入していたのでしょう。」⁶⁰⁾とある。これは「本文庫ハ国民ノ熱烈ナル兵営寄付金ヲ以テ調整シ従軍者一同に頒布スルモノナリ 昭和十九年一月 陸軍恤兵部」なる記載のある岩波文庫のレーン・モントフ「現代のヒーロー」についての記述である。特注の非売品だったこの本の表紙には「若松陸軍病院」のスタンプが読み取られる。一般の兵士は公認の書物しか読むことはできなかったのではないか。それも病院という兵営とは別種の場所においてである。この回想は昭和時代についてであるから、大正時代や昭和初期は事情が違ってもよいかもしれない。しかし一般兵士が軍隊生活で本を読む余裕がなかったことに変化はなかったのではないか。一般兵士の内務班における生活において個人的な読書の機会が存在したとは考えにくい。また思想面においては上からの厳格なコントロール下におかれているのが日本の一般兵士の状況であった。事情は大正時代も大きくは変わらなかったのではないか。

ドイツのアフリカに配置された第1海兵大隊と第2海兵大隊などにおける状況はどうだったのか。あるいは日本は海外の支配地に一般の兵士や現地住民用の図書館を設けたことは

あったのか。これは文化的な展望において大きな問題をはらむテーマであるが、今後の研究の課題である。

ドイツ海軍が青島の兵士のためにいかなる書物を供したか。山形大学図書館の鹵獲書籍から知られるところでは、トルストイやツルゲーネフなどのロシア文学が目立つことである。大正時代のロシア文学人気からすれば、独訳ロシア文学に対する欲求が強かったのかもしれない。また図書館にはすでにドイツ系の書籍は存在していたことも理由かもしれない。鹵獲書籍のドイツものでは当時の人気小説と思われるものばかりといってよく、ゲーテ、シラーなどの古典作品は見当たらないのである。

これらの書籍の中で注目されるのはドイツ皇帝などの支配者をたたえ、愛国心や忠誠心を涵養しようとする読み物である。「38」「42」「43」「44」「45」「48」「49」「60」「78」「79」がそれである。全体のほとんど一割の割合となっている。たとえば「38」「ヴィルヘルム1世。ドイツ皇帝にしてプロイセン国王」（1890）は「ドイツ国民に捧げる」という副題がついている。小型とはいえ270ページに及ぶこの本の結末はこうである。「このようにして皇帝ヴィルヘルム1世の生涯は完成された。人生において偉大、悩みにおいて偉大、勝利において偉大、死において最も偉大に。」⁶¹⁾また「42」シュラーダーの「フリードリッヒ大王と七年戦争」の冒頭は「太鼓が響く。ラッパが鳴る。戦闘に我々は進む。フリードリッヒ大王が勝利を約束するところへ。たとえ大地が大王とともにふたつに裂けようとも、大王のプロイセン人は忠実である。」⁶²⁾この本を出版したフレミング社（Carl Flemming）は特に青少年むけに同じような本を多く出版している。「78」は「30年戦争以来のホーエンツォルレルン家の君主の人物像と性格」である。「青少年とその友人のため」という副題のある本である。プロイセン国王からドイツ皇帝となったヴィルヘルム1世については、まずその両親の結婚から説明される。父フリードリッヒ・ヴィルヘルム3世はメクレンブルクの王女ルイーゼと結婚する。プロイセン人は等しくこの神の恩寵ある夫婦を祝福した。ふたりの国民に対する献身と貧しい人びとへの配慮そして敬虔さはいつの時代でも手本である。1797年には現国王ヴィルヘルムが生まれた。「この子ははじめやんちゃであったので、両親や周囲を心配させた。」⁶³⁾1849年10月19日には国防軍の先頭になってはじめてベルリンに凱旋したことや、オーストリアとの戦争における皇帝の態度そして、それにかからんだナポレオン3世のフランスに対する態度などが説明される。「ドイツ国民は英雄的な国王に対する侮辱に必死に耐えた。そして『武器をとれ。祖国の危機だ』という国王の声に全ドイツが剣をとった。そして『ドイツ人の祖国（Was ist des Deutschen Vaterland ?）』を歌って、武器でもって回答した。現皇帝に1831年10月18日に生まれたのが今日ドイツ国民の敬愛のままとである皇太子Friedrich Wilhelm, 愛称Fritzである。」⁶⁴⁾ドイツ人にとって10月18日というのは特別な意味を持つ日で

あった。上記フリードリッヒ・ヴィルヘルム 3 世は1813年 3 月にフランスに対して宣戦を布告し、「国民に寄す (An mein Volk)」を発表する。プロイセン軍にはドイツ全土から熱狂した義勇兵が集まり、プロイセン軍の兵力は 5 倍となった。こうして同じ年の10月17日から19日にかけてライプチヒ近郊における「諸国民戦争」の戦いとなる。プロイセン、オーストリアそしてロシアの連合軍とドイツのザクセン王国なども含めたナポレオン率いるフランス軍の戦いである。連合軍の勝利となるが、戦死者は双方合わせて12万人という戦いであった。特に決定的な戦いがなされたのは10月18日である。この日は「ドイツ解放の記念日」⁶⁵⁾として記念日となる。(これについては奥村論文を参照されたい。)⁶⁶⁾たとえばハンブルクではこの日は「盛大に祝われ」⁶⁷⁾、市立劇場では長いこと記念公演が催されたという。戦いの中核となったプロイセンの後裔であるドイツ皇帝にとってこの日は特別な意味を有したわけである。10月18日生まれが強調されるのは、皇帝の神話化の意図がある。「青少年とその友人のため」の本によって、ドイツの兵士は国王に対する忠誠心や愛国心を植え付けられたことが知られる。

この本で注目されるのはビスマルクの扱いである。首相ビスマルクは高齢の皇帝ヴィルヘルム 1 世の信任は厚かったが、皇太子フリードリッヒ「愛称フリッツ (Fritz)」とは対立していた。高齢の皇帝は1888年 3 月に91歳で死去すると、皇太子フリードリッヒ、すなわちフリッツがフリードリッヒ 3 世として後継者となった。しかしこのフリードリッヒ 3 世の在位は99日しか続かなかった。彼が1888年 7 月25日に病死をすると、その29歳の息子がヴィルヘルム 2 世としてプロイセン国王兼ドイツ皇帝になった。ビスマルクは政治的対立から1890年 3 月20日に退任する。1871年以來の地位の退任であった。ビスマルクはすでに1877年に皇太子、後の皇帝フリードリッヒ 3 世との意見の対立が生じていて、退任を示唆したことがあったのである。それはいうならば強権政治とリベラル派の対立であった。この「78」の本には10枚のイラストがついているにもかかわらず、1871年 1 月18日のヴィルヘルム 1 世のドイツ皇帝への就任式典の絵画はない。ヴェルサイユ宮殿でドイツ諸侯を前にして皇帝に推戴されている光景の絵画で、歴史教科書でもおなじみの絵画である。1 段高くに皇帝が立っていて、その右手にビスマルクがいる。ひとり白い上着をつけていて目立つ絵画である。「78」書の出版年は不明であるが、1882年 2 月付けの序言がついている。この本は1882年以降の出版であることがわかる。ビスマルクが目立つ絵画が掲載されなかった事情は以上であろう。

「79」「皇帝フリードリッヒ 3 世。耐える国王の人物像」(1888) でも同じ作者が、プロイセンのヴィルヘルム皇太子 (Prinz Wilhelm) のザクセン=ワイマールのアウグスタ皇女 (Prinzessin Augusta) との結婚の経緯から描写する。1829年に二人は結婚し、「1831年10月18日にポツダム近郊で皇妃は男児を生んだ。あのライプチヒ近郊の戦いの勝利の日に」⁶⁸⁾と

書いて、神話化に努めている。この男児とは前出の「愛称フリッツ (Fritz)」のことである。「49」の「ドイツの誠実」は、ドイツ中世の史実をもととする物語である。14世紀前半のオーストリア・ハプスブルク家のフリードリッヒ (Friedrich) 美王とバイエルン王国のルードヴィッヒ (Ludwig) の話である。神聖ローマ帝国の皇帝の位をめぐって戦った二人ではあるが、ルードヴィッヒが皇帝に選挙されると、フリードリッヒもそれを認める。しかし彼はなおも弟レオポルト (Leopold) が抵抗していたため、説得に赴く。そして説得に失敗した場合ももどってきて、ルードヴィッヒによって幽閉されることを約束をする。説得は失敗し、フリードリッヒはルードヴィッヒのもとに帰還する。逃亡はたやすいことだったのに。「誓いに誠実に (treu)」⁶⁹⁾。表題の「ドイツの誠実」の意味がこれである。二人をめぐる中世の歴史はドイツの詩人達もテーマとしていて、シラーの詩「ドイツの誠実 (Deutsche Treue)」やウーランとのドラマ「バイエルン王ルートヴィッヒ」が知られている。誠実の物語ではあるが、それは容易にドイツ皇帝に対する忠誠に推移するものだったのである。青島の戦記を著したゴットベルクが「皇帝と帝国のためにドイツの兵士の忠誠の炎が、青島よりも強く熱くそして純粋に燃えたところではなかった」⁷⁰⁾とドイツ兵の戦いぶりを誇示するようにである。ゴットベルクの戦記は戦時中に出版されたわけであるから、この青島戦記はドイツ人とドイツ兵の士気高揚の意図にあふれているわけである。

こうした鹵獲書籍のなかに「25」「26」ストー夫人の「アンクル・トム」とか「103」アミーチスの「母をたずねて三千里」などを見出すと、異国駐留のドイツ兵に対する親近感にわかに高まるのは筆者だけではないであろう。ほかにも愛国忠誠とはおよそ無縁の書籍も少なくない。「1」のドイツ小説「女自転車教師」はベルリンを舞台にした青春恋愛小説である。一方には生きる目的を見失っている青年実業家ルドルフがいて、シュニッツラー風の世紀末的雰囲気伝える。工場経営は先代からの老支配人任せでよい。そしてもう一方にはフランクフルトから姉メータを訪ねてきた妹レーナがいる。無邪気な彼女はベルリンの市中を女だてらに自転車を乗り回し、姉のひんしゅくを買う。姉の夫は金融関係らしい仕事人間である。ルドルフはレーナにすすめられ、自転車学校に通い、運動神経のよさを発揮する。こうして二人の仲は親密さをます。このような読み物もドイツの軍隊図書館に存在していたのである。レーの「女自転車教師」が青島の兵士によって随分読まれたらしいことは、本が手垢によぐれ、書き込みもされていることから判断できる。

第一次世界大戦以前のドイツ軍、青島の第3海兵大隊にも兵士の愛国心を涵養し、ドイツ皇帝に対する忠誠心を植え付けようという意思は強かった。しかし兵士に対して「ものを考える余裕」を絶対的に奪うというまでにはいたっていない。そのことは図書館の恋愛ものや冒険ものなどの本の存在から知られる。そして兵士が好んで読んだのはむしろそのような軟弱文学だったらしいことが、書き込みや本の汚れ方などから知られる。それと第一次大

戦の「イーブルの子殺し」に代表されるような圧倒的な愛国心の高揚との距離は大きい。その距離を縮めたものはなにか。今後の課題である。

山形高等学校にも「高等学校には文学作品を中心とした一般教養書に向いた書籍」が分配されたことはリストからも証明される。しかし愛国心高揚を目的とするような書籍の比率も小さくはない。この点に関しては他の分配先との比較がなされるならば興味深い結果が出ると思われるのである。

(5)

青島の「鹵獲書籍及図面目録」に掲載の書籍と山形大学所蔵の鹵獲書籍で書名が一致するのは少ない。一覧にすれば以下になる。〈い-183〉以下は「目録」のページであり、(1355)以下は「目録」における整理番号である。また「」は山形大学所蔵本の筆者による番号である。作者名や作品題目は「目録」そのままである。

- 〈い-183〉 (1355) キューン「バルバロッサ」……………「44」「49」
- 〈い-185〉 (1369) コエラー「独逸皇帝ウヰルヘルム一世」(1890)……………「38」
- 〈い-301〉 (2328) ゴムマアフェルド「カモラ組の秘密」……………「100」
- 〈い-364〉 (2363) ロエウェンフェルド訳、トルストイ「コサック」……………「10」
- 〈い-310-〉 (2434) ハイヒェン訳ヴェルン「ヘクトル、セルヴァダクの冒険」
第1, 第2巻……………「97」「98」
- 〈い-318〉 (2533) レー「女自転車乗」(1897)……………「1」
- 〈い-327-〉 (2630) ブーフ「名の為めに」(1897)……………「41」
- 〈い-327-〉 (2631) ブレネカウム「村の記録」(1889)……………「61」
- 〈い-327-〉 (2633) ヘルレン「自由」(1897)……………「29」

以上の本が山形大学に実際に分配された本と一致するかはいまのところ不明である。しかしすべて一致するとしても、全体の108冊に比較するならば割合は大きくない。山形高等学校はもっぱら他の目録をもとに分配を希望したと考えられる。またリストから知られるように同名の本が2冊、3冊と重複している場合もある。分配を希望するならば、可能な限り別の本を希望するはずである。なぜ重複が生じているのかは不明である。また「カモラ組の秘密」などというイタリアのマフィアの研究書めいたものが分配されているのも目をひく。高等学校生徒の「一般教養に向いた書籍」とはいえないであろう。作者ゾンマーフェルト(Adolf Sommerfeld, 1830-1931)はベルリンなど大都会の暗黒世界ものを得意としていたようであるが、不思議である。

「鹵獲書籍及図面目録」には〈い-301〉(2328) シュツェ「啓ちやんと角ちやんとあた

い」（1901）とか、くいー312ー>（2641）ファノール「天麩羅紳士」（1913）あるいはく
いー320ー>（作者名なし）「女護島」、そしてくいー327ー>（2634）ホエツカア「転ばぬ
先の杖（上部シレジヤ物語）」（1900）といった訳名が散見される。山形大学図書館には存在
しないので原題は不明であるが、好奇心を誘う訳題である。鹵獲書籍類の目録作成や日本語
への翻訳は難儀な作業だったはずだが、こうした訳題から見ると作業には遊び心が残って
いたらしい。それが大正という時代だったのかもしれない。

「注」

- 1) 志村恵：日独戦争と青島鹵獲書籍（「独文研究室報」2002，金沢大学独文研究会，第17号,p.25）
- 2) Thomas Flemming: „Grüße aus dem Schützengraben.Feldpostkarten im Ersten Weltkrieg aus der Sammlung Ulf Heinrich“ be.bra verlag, Berlin 2004, S.108
- 3) „Die Zeit“ Nr.44, 21.Oktober 2004)
- 4) 「1億人の昭和史」11,（昭和への道ー大正）毎日新聞社，1976，p.42
- 5) 阿川弘之，猪瀬直樹，中西輝政，秦郁彦，福田和也「二十世紀日本の戦争」（文春新書，平成12）p.16
- 6) 同上書，p.37
- 7) <http://www.jadu.de/jaduland/kolonien/asien/kiautschou/helden/tsihelden8.html>
（Otto von Gottbergの記録はここに掲載）
- 8) <http://www.takahashistamp.com/2note26.htm>
- 9) 志村，p.18
- 10) 瀬戸武彦：青島（チンタオ）をめぐるドイツと日本（2），日独戦争とドイツ人捕虜（「高知大学学術研
究報告」第48巻，人文科学，1999，p.108）
- 11) 志村，p.19
- 12) 7) に同じ
- 13) ジョン・キーガン（遠藤利国訳）「戦略の歴史」心交社，1997，p.399
- 14) Michael Stürmer: „Das ruhelose Reich,1866-1918“ („Siedler Deutsche Geschichte“) ,S.373f.
- 15) ギュンター・グラス（林睦實，岩淵達治訳）「私の一世紀」早稲田大学出版部，2001，p.69
- 16) レマルク（秦豊吉訳）「西部戦線異常なし」新潮文庫，昭和30，p.17
- 17) キーガン，p.399
- 18) ヒトラー（平野一郎，将積茂訳）「我が闘争」角川文庫，（上），p.238
- 19) トーランド（永井淳訳）「アドルフ・ヒトラー」集英社文庫，1990,p.134
- 20) 「我が闘争」（上），p.239
- 21) 「ヒトラー全記録」柏書房，2001，p.31
- 22) ヴィットコップ編（高橋健二訳）「ドイツ戦没学生の手紙」岩波新書，昭和16，p.23
- 23) 同上，p.24
- 24) 司馬遼太郎「坂の上の雲」秘話（上）（「週刊朝日未公開講演記録愛蔵版，司馬遼太郎が語る日本」，朝

- 日新聞社, 1996, p.94)
- 25) 平間洋一「百五十余日の攻防戦が世界にもたらしたもの」(「歴史街道」9, PHP研究所,平成16年9月号 p.41)
- 26) 同上, p.42
- 27) 司馬遼太郎:薩摩人の日露戦争(上)(「司馬遼太郎が語る日本」Ⅲ, 1997,p.89)
- 28) Theodor Körner : Sämtliche Werke in einem Band, Leipzig, Phillip Reclam jun.,S.190
- 29) Körner : a.a.O.S.XVII (Einleitung)
- 30) Körner,a.a.O.S.204
- 31) Heinrich von Treitschke:„Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert“,Erster Teil,1981,S.435
- 32) <http://de.wikipedia.org/wiki/An-die-Kulturwelt>
- 33) 長橋芙美子「アルノルト・ツヴァイクの短編『ヘルプレート・フリーデリンガー』, 第一次大戦と改稿をめぐって」
- 34) Thomas Mann,Gesammelte Werke, Fischer Verlag , 1974 , Bd. XIII,S.544
- 35) Mann,a.a.O.Bd. XIII S. 534
- 36) Hermann Hesse,Gesammelte Werke, Suhrkamp 1987,Bd.10,S.411f.
- 37) 志村, p.22に拠る
- 38) 志村, p.22
- 39) <http://furyokenkyu.hp.infoseek.co.jp/n.8.htm>
- 40) 志村, p.20
- 41) 志村, p.22
- 42) 志村, p.23
- 43) 志村, p.23
- 44) 志村, p.25
- 45) 志村, p.24
- 46) Leeの本(344/ 26;6577)は請求記号に従えば(344/1/25;6413)のRené Schickele:„Ein Erbe am Rhein“, Roman,Erster Band.Kurt Wolff Verlag,München (シッケレ「ラインの遺産」第1巻)に続くものである。シッケレの本は昭和19年3月29日受け入れで, 納付元は郁文堂である。(344/2/25;6414) はシッケレの第2巻で, 昭和19年3月28日である。(344/1/24;66407) から (344/4/24;66410) はフォンターネの小説で, 昭和19年3月28日受け入れで, 郁文堂の納入である。ちなみに山形高等学校ドイツ語系洋書受け入れ第1号のマン「あきれた教授」の請求記号は (344/ 1;521), 第2号のワーグナーの本は (344/ 2;823) である。
- 47) 志村, p.24
- 48) <http://kaiserliche-marin-seiten.de/AufBeh.html>
- 49) <http://www.miniatures.de/html/ger/1914-kaiserliche-marine.html>
- 50) <http://www.Seefliegr.de/holtenau/geschichite/plueschow/gunther-plueschow.htm>

- 51) 瀬戸武彦の「高知大学学術研究報告」（人文科学）の一連の研究や「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究会の『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』（鳴門市ドイツ館）創刊号，2003や第1号，2004，第2号，2005参照。また「チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会」の「メール会報」（差出人小阪清行）も大変参考になる。
- 52) <http://www.dhm.de/ausstellungen/tsingtau/katalog/aus2-6.htm>
- 53) <http://www.marinekameradschaft-cuxhaven.de/standort4.html>
- 54) <http://www.dhm.de/ausstellungen/tsingtau/katalog/auf1-9.html>
- 55) 同上
- 56) ”
- 57) 阿川弘之「雲の墓標」（『昭和戦争文学全集』10，青年士官の戦史，集英社，昭和40，p.50）
- 58) 「昭和戦争文学全集」7，集英社，昭和40年,p.421
- 59) 加賀乙彦「帰らざる夏」（下），講談社文庫，昭和52，p.66
- 60) <http://yonosk.at.infoseek.co.jp/manchu.htm>
- 61) F.Köhler,„Wilhelm I .Deutscher Kaiser und König von Preußen“ 1890,S.270
- 62) Ferdinand Schrader,„Friedrich der Große und der Siebenjährige Krieg“,S.5
- 63) Hans Wolter,„Lebensbild und Charakterzüge der Hoehenzollerschen Fürsten seit dem dreißigsten Kriege“, E.Bertelsmann,Gütersloh,S.128
- 64) Wolter:a.a.O.S.139
- 65) Ludwig Börne „Briefe aus Paris“ Insel Verlag, 1986,S.44
- 66) 奥村淳「発見されたヘッベルの詩 „Zum 18. October 1835“ について」（『山形大学紀要（人文科学編）』第12巻第2号，平成3年参照）
- 67) Heinz Stolte „Wilhelm Hocker, Dichter und Rebell aus dem hamburgischen Vormärz“(In:„Hebbel-Jahrbuch 1977“,S.53)
- 68) Hans Wolter „Kaiser Friedrich III. Ein Lebensbild des königlichen Duldens“ N.Herrosés, 1888,S. 3 f.
- 69) Franz Kühn : „Deutsche Treue“ Carl Flemming, Glogau,S. 183
- 70) 7) に同じ

* 末尾ながら調査にご協力いただいた山形大学図書館の職員の方々に厚くお礼申し上げます。

Über die deutschen Beutebücher in Yamagata, die nach dem Ersten Weltkrieg von Tsingtau in China nach Japan gebracht worden sind

OKUMURA Atsushi

In den Beständen der Bibliothek der Universität Yamagata gibt es wenigstens 108 deutsche Bücher und Bücherkataloge, die nach dem Ersten Weltkrieg als Beutebücher von Tsingtau in China nach Japan gebracht und an Institute, Universitäten und Schulen verteilt worden sind. Nach wold mehr als 60 Jahren sind diese Bücher vom Verfasser dieser Abhandlung aufgefunden und numeriert worden. Dabei werden die Titel der Kataloge und Bücher mit den Namen ihrer Verfasser genannt, damit man diese Kataloge und Bücher mit Beutebüchern anderer Bibliotheken vergleichen kann. In der Abhandlung wird außerdem über die Verteilung der erbeuteten deutschen Bücher an die Yamagata-Universität, damals Yamagata Higher School, nachgedacht. Aus der Analyse dieser Bücher sind sowohl die Orientierung der Politik des kaiserlichen Deutschlands als auch die seelische Situation der deutschen Soldaten zu erkennen. Anhand eines Vergleichs mit der Lektüre an japanischen Kasernen ist zudem ein kultureller Unterschied festzustellen.

山形大学図書館青島函獲書籍リスト

(2005年10月1日現在)

- 「0-1」 „Instruktion für die alphabetischen Kataloge der preußischen Bibliotheken vom 10. Mai 1908“
(Zweite Ausgabe in der Fassung vom 10. August 1908, Berlin, Behrend, 1909) (「プロイセン図書館アル
ファベット順目録解説」)
- 「0-2」 (110/1/22) „Deutscher Literatur Katalog 1910-1911“ (F. Volkmar und L. Staatsmann) (「ドイツ書
籍目録 1910-1911」)
- 「0-3」 (110/2/22) „Deutscher Literatur Katalog 1911-1913“ (F. Volkmar und L. Staatsmann)
- 「0-4」 (110/3/22) „Deutscher Literatur Katalog 1913-1914“ (F. Volkmar und L. Staatsmann)
- 「0-5」 (110/ 25) „Deutscher Literatur Katalog 1909-1910“ (F. Volkmar und L. Staatsmann)
- (以上は書籍目録である)

.....

- 「1」 (344/ 26 ;6577) Lee, Heinrich: „Die Radlerin“ ,Roman, Berlin, Verlag von Carl Duncker, 1887
(レー「女自転車教師」)
- 「2」 (344/ 27; 6791) Tolstoi, Graf Leo A.: „Auferstehung“ ,Roman, Leipzig, Druck und Verlag von Phillip
Reclam jun.
(トルストイ「復活」)
- 「3」 (344/ 1/28;7129) Tolstoi, Graf Leo A.: „Krieg und Frieden“ ,Historischer Roman, Mit Genehmigung
des Autors, Dritter Auflage, Erster Band, Druck und Verlag von Phillip Reclam jun.
(トルストイ「戦争と平和」第1巻)
- 「4」 (344/2/28;6795) Tolstoi, Graf Leo A.: „Krieg und Frieden“ , Zweiter Band.
(トルストイ「戦争と平和」第2巻)
- 「5」 (344/1/29;6795) Tolstoi, Graf Leo A.: „Anna Karenina“ , Roman, Nach der siebentern Auflage, Erster
Band, Leipzig, Druck und Verlag von Phillip Reclam jun.
(トルストイ「アンナ・カレニナ」第1巻)
- 「6」 (344/2/29;6796) Tolstoi: „Anna Karenina“ ,Zweiter Band. Phillip Reclam jun.
(トルストイ「アンナ・カレニナ」第2巻)
- 「7」 (344/1/30;6797) Tolstoi, Graf Leo A.: „Volkserzählungen“ , Leipzig, Druck und Verlag von Phillip
Reclam jun.
(トルストイ「民話」)
- 「8」 (344/2/30;6798) Tolstoi: „Volkserzählungen“ ,Phillip Rec. jun. (同上)
- 「9」 (344/3/30;6799) Tolstoi: „Volkserzählungen“ ,Phillip Rec. jun. (同上)
- 「7」「8」「9」は同じレクラム本であり、本文ページ数も同じだが、巻末のレクラム社広告がそれぞれ
別であるので同一本ではない。また「7」「8」は茶色、「9」は青色表紙である。

- [10] (344/ 31;6800) Tolstoi,Graf Leo A.: „Die Kosaken.Eine Erzählung aus dem Kaukasus“, Leipzig,Phillip Reclam jun.
(トルストイ「コザック。コーカサスの物語」)
- [11] (344/ 32;6801) Turgenjeff,Iwan: „Ein König Lear der Steppe“,Leipzig,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「ステップの王リア」)
- [12] (344/ /33;6802) Turgenjeff,Iwan: „Gedichte in Prosa“,Leipzig,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「散文詩集」)
- [13] (344/ /34;6803) Turgenjeff,Iwan: „Frühlingsmorgen“,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「春の朝」)
- [14] (344/ /35;6804) Turgenjeff,Iwan: „Rudin und Baburin“,Leipzig,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「ルージンとバブーリン」)
- [15] (344/1/36;6805) Turgenjeff,Iwan: „Dunst“, Leipzig,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「もや」)
- [16] (344/2/36;6818) Turgenjeff,Iwan: „Dunst“,Leipzig,Phillip Reclam jun. (同上)
- [17] (344/ /37;6806) Turgenjeff,Iwan: „Memoiren eines Jägers“,Leipzig,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「獵人日記」)
- [18] (344/1/38;6807) Turgenjeff,Iwan: „Väter und Söhne“,Leupzig,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「父と子」)
- [19] (344/2/38;6817) Turgenjeff,Iwan: „Väter und Söhne“,Leipzig,Phillip Reclam jun.
(ツルゲーネフ「父と子」)
- 「18」は296ページ,「19」は304ページである。
- [20] (344/ /39;6808) Flaubert,Gustav: „Salambo“,Roman, Leipzig,Phillip Reclam jun.
(フロベール「サランボ」)
- [21] (344/ /40;6810) Lesage: „Geschichte des Gil Blas von Santillana“, Phillip Reclam jun.
(ルサーージュ「ジル・ブラース」)
- [22] (344/ /41;6811) Sterne,Laurence: „Empfindsame Reise durch Frankreich und Italien“,Leipzig,Phillip Reclam jun.
(スターン「フランス, イタリア感情紀行」)
- [23] (344/ /42;6813) Swift,Jonathan: „Gulliver's Reisen“, Leipzig,Phillip Reclam jun.
(スウィフト「ガリバー旅行記」)
- [24] (344/ /43;6814) Erckmann=Chatrian: „Der berühmte Doktor Matäus“, Erzählung,Leipzig,Phillip Reclam jun.
(エルクマン=シャトリアン「著名医師マテウス」)
- [25] (344/1/44;6815) Stowe,Harriet Beecher: „Onkel Tom's Hütte oder Negerleben in den Sklavenstaaten von Amerika“, Leipzig,Phillip Reclam jun.

- （ストー夫人「アンクル・トムの小屋」）
- [26] (344/2/44;6816) Stowe: „Onkel Tom’s Hütte“(「25」に同一)
- [27] (344/1/45;7030) Weitbrecht, Richard: „Der Kopf des Apostels — Eine Altertümergegeschichte“, Barmen, Verlag von Hugo Klein
（ヴァイトブレヒト「使徒の首」）
- [28] (344/2/45;7031) Weitbrecht, Richard: „Der Kopf des Apostels“(「27」に同一)
- [29] (344/ 46;7032) Hellen, G. von: „Neue Volksbücher“, Herausgegeben von der Vereinigung von Freunden christlicher Volks=Literatur, Erzählung, 19. Bändchen, Berlin 1897
（ヘレン「新民話」）
- [30] (344/1/47;7033) Weitbrecht, R.: „Von der Blockhütte zum Präsidentenpalast. Lebensgeschichte James Gairfields“, Stuttgart, 1884, Druck und Verlag von J.F. Steinkopf
（ヴァイトブレヒト「あばら小屋から大統領宮殿へ」）
- [31] (344/ 2/47;7034) Weitbrecht, R.: „Von der Blockhütte zum Präsidentenpalast“(「30」に同じ)
- [32] (344/1/48;7035) Wilhelm, J.: „Ich habe dich je und je geliebt: darum habe ich dich zu mir gezogen aus lauter Güte“, Barmen, Verlag von Hugo Klein
（ヴィルヘルム「我窮なき愛をもて汝を愛せり」）
- [33] (344/2/48;7036) Wilhelm: „Ich habe dich je und je geliebt …“(「32」に同じ)
- [34] (344/3/48;7037) Wilhelm: „Ich habe dich je und je geliebt …“(「32」に同じ)
- [35] (344/ 49;7038) Hinzelin, Émile: „Stenka Razin“, Paris, Paul Ollendorff, 1893（フランス語本）（アンゼラン「ステンカ・ラージン」）
- [36] (344/ 50;7039) Halévy, Ludvic: „Criquelette“, Roman, Stuttgart, Verlag von J. Engelhorn, 1885
（アレヴィ「きりぎりす」）
- [37] (344/ 51;7040) Weitbrecht, Richard: „Der Bauernpfeifer. Ein Wallfahrergeschichte aus dem 15. Jahrhundert“, Verlag von Hugo Klein, 1887
（ヴァイトブレヒト「農民のバグパイプ弾き」）
- [38] (344/ 52;7041) Köhler, F.: „Wilhelm I., Deutscher Kaiser und König von Preußen, dem deutschen Volk erzählt“, Herausgegeben vom christlichen Verein im nördlichen Deutschland, 1890.
（ケーラー「ヴィルヘルム一世。ドイツ皇帝にしてプロイセン国王」）
- [39] 344/1/53;7042) Weitbrecht, Richard: „Der Haidebbauer und seine Söhne. Eine Wuchergesvchichte“, Barmen, Verlag von Hugo Klein.
（ヴァイトブレヒト「荒地の農民と息子」）
- [40] (344/ 2/53;7043) Weitbrecht, Richard: „Der Haidenbauer und seine Söhne“
「39」に同一本
- [41] (344/ 54;7044) Buch, W. von: „Am Ehre und Ruhm“, Erzählung, Berlin, 1897.
（ブーフ「名誉と名声」）

- [42] (344/1/55;7045) Schrader,Ferdinad: „Friedrich der Große und Der Siebenjährige Krieg“
Glogau, Verlag von Carl Flemming
Carl Flemmings vaterländische Jugendschriftenは全60巻。その第9巻。
(シュラーダー「フリードリッヒ大王と七年戦争」)
- [43] (344/2//55;7046) Kühn,Franz: „Leuthen. Eine Erzählung für die Jugend“, Dritter Auflage,
Glogau,Verlag von Carl Flemming
(キューン「人びと」)
- [44] (344/3/55;7047) Kühn,Franz: „Barbarossa,Eine Erzählung aus der Geschichte desDeutschen Volkes“,
Vierte Auflage, Glogau,Verlag von Carl Flemming.
(キューン「バルバロッサ」)
- [45] (344/4/55;7048) Köppen, Fedor von: „Hohenzollern und Brandenburg“, Vaterländische Geschichten,
Glogau,Verlag von Carl Flemming. Carl Flemmings vaterländische Jugendschriften X X X I .Band
(ケッペン「ホーエンツォルレン」)
- [46] (344/ /56;7049) Tolstoi,Graf Leo A.: „Der Leinwandmesser und andere Geschichte“, Berlin, Verlag
von Otto Janke.
(トルストイ「亜麻布ナイフと他の物語」)
- [47] (344/ /57;7050) Turgenjeff,Iwan: „Ein König Lear der Steppe“, Berlin/Eisenach/Leipzig,Hermann
Hillger Verlag,1895
(ツルゲーネフ「ステップの王リア」)
- [48] (344/1/58;7051) Kühn,Franz: „Deutsche Treue“,Eine Erzählung aus dem deutschen Volkes. Dritter
Auflage, Spiegelbilder aus der Geschichte des deutschen Vaterlandes. IX .Band, Verlag von Carl
Flemming,Glogau
(キューン「ドイツの誠実」)
- [49] (344/2/58;7052) Kühn,Franz: „Barbarossa. Eine Erzählung aus der Geschichite des deutschen
Volkes“, Vierte Auflage. Spiegelbilder aus der Geschichte des deutschen Vaterlandes. X .Band
Glogau,Verlag von Carl Flemming
(キューン「バルバロッサ」)
- [50] (344/ /59;7053) Tolstoi,Graf Leo: „Herr und Knecht“, Erzählung,Dritter Auflage,Berlin, Verlag von
Neusfeld und Henius.
(トルストイ「主人と奴隷」)
- [51] (344/ /60;7054) Tschchow,Anton: „Die Hexe und andere Novellen“, Kalle a. d. S.,Verlag von Otto
Hunde
(チェホフ「魔女と他の小説」)
- [52] (344/ /61;7055) Turgenjew,Iwan: „Erzählung eines alten Mannes“, Dritter Auflage,Berlin,Verlag
von Otto Janke.

- （ツルゲーネフ「ある老人の物語」）
- [53] (344/1/62;7056) Wildermuth,Ottile: „Die Salome weiß Rath !“,Barmen, Verlag von Hugo Klein
（ヴィルダームート「賢いサロメ」）
- [54] (344/2/62;7057) Wildermuth,Ottile: „Die Salome weiß Rath !“
- [55] (344/1/63;7058) Weitbrecht,Richard: „Des Meisters Tochter. Eine Handwerkersgeschichte“,Barmen,
Verlag von Hugo Klein
（ヴァイトブレヒト「親方の娘」）
- [56] (344/2/63;7059) Weitbrecht, Richard: „Des Meisters Tochter.Eine Handwerkergeschichte“,Barmen,
verlag von Hugo Klein. （同上）
[55] は茶色の表紙で, [56] は紫色の表紙
- [57] (3/63) Weitbrecht,Richard: „Des Meisters Tochter. Eine Handwerkergeschichte“,Barmen, Verlag
von Hugo Klein （同上）
[55] に同じく, 茶色の表紙
- [58] (344/1/64;7061) Weitbrecht, Richard: „Ein Glassplitter. Glänzendes Elend. Zwei
abenteuerliche Geschichten. Barmen,Verlag von Hugo Klein
（ヴァイトブレヒト「ガラスのかげら」）
- [59] (344/2/64;7062) Weitbrecht,Richard: „Ein Glassplitter. Glänzendes Elend. Zwei
Abenteuerliche Geschichten“ (同上)
[58] [59] は同一本
- [60] (344/ /65;7063) Sonnenberg,Ferdinad: „Unter dem Schwerte der Weißmäntel“,Erzählung aus dem
fünfzehnten Jahrhundert., Glogau,Verlag von Carl Flemming.
（ゾンネンベルク「白外套の剣の下に」）
- [61] (344/ /66;7064) Brennerkam,Otto: „Aus einer Dorfchronik. Eine Erzählung“ Berlin, 1889,
Hauptverein für christliche Erbarmungsschriften
（ブレネンカーム「村の歴史から」）
- [62] (344/ /67;7065) Berger,Alfred Freiherr von: „Wie das Wintermärchen entstand. Dichtung und
Wahrheit aus Shakespeares Leben“,Verlaganstalt und Druckerei A.G./ (Vormals L.J.Richter) in
Hamburg.
（ベルガー「冬のメルヘンはいかにして生まれたか。シェークスピアの生涯の詩と真実」）
- [63] (344/ /68;7066) Weißner,Hermann: „Fabrikant oder Meister ? Eine Geschichte aus dem Leben,
für das Volk erzählt“,Stuttgart, Druck und Verlag von I.J.Steinkopf
（ヴァイスナー「工場主か親方か」）
- [64] (344/ /69;7067) Stacpoole,Henry de Vere: „Der Bourgeois“. (Engelhorns
allgemeineRoman=Bibliothek. Eine Auswahl der besten modernen Romane aller Völker. 20.
Jahrgang,Band. II) Autorisierte Übersetzung ausdem Englischen von Emmy Becher. Stuttgart,Verlag

von J. Engelhorn, 1904.

(スタクプール「ブルジョワ」)

[65] (344/ 70;7068) Sims, George R.: „Möblierte Wohnzimmer. Erinnerung einer Vermieterin“, Autorisierte Uebersetzung aus dem Englischen von Emmy Becher, Stuttgart, Verlag von J. Engelhorn 1895

(シムズ「女家主の家具付き部屋」)

[66] (344/ 71;7069) Tolstoi, Graf Leo: „Die Kreutzer-Sonate“, Stuttgart, Franck'sche Verlagshandlung (トルストイ「クロイチェルソナタ」)

[67] (344/ 72;7070) Erckmann=Chatrian: „Freund Fritz. Bild aus dem Kleinstadtleben“, Halle, Druck und Verlag von Otto Hendel.

(エルクマン=シャトリアン「友人フリッツ」)

「前書き」(1889)によればErckmannとChatrianはふたりのフランス作家。である。ロートリンゲンで1822年と1826年生まれ。ともにPfalzburgで活動の後パリに定住。革命歴史ものとナポレオン遠征もの。

[68] (344/ 73;7071) Tolstoi, Graf Leo: „Anna Karenina“, Erster Band. Berlin, 1897, Verlag von August Deubner.

(トルストイ「アンナ・カレーニナ」第1巻)

[69] (344/ 74;7072) Sollogub, Graf W.H.: „Vornehme Welt. Eine Novelle in zwei Bänden“. Erster Teil. Leipzig, Gressenr und Schramm,.

(ゾログーブ「上流世界」)

[70] (344/ 75;7073) Tolstoi, Graf Leo: „Sewastopol“, Verlag von Otto Janke, Berlin.

(トルストイ「セバストーポル」)

[71] (344/ 76;7074) Savage, Richard Henry: „Hexe von Harlem“, Erster Band. Stuttgart, Verlag von J. Engelhorn.

(サヴェジ「ハーレムの魔女」)

[72] (344/ 77;7075) Sinclair, Apton: „Der Sumpf. Roman aus Chicagos Schlachthäusern“ Hannover, Verlag Adolf Sponholtz, 1906

(シンクレア「泥地」)

山形大学図書館の請求記号ではこれに続く2冊の本, 「344/ 78」と「344/ 79」の2冊は1936年と1932年の出版である。山形高等学校の登録では函獲書籍に並んでいるが, 整理間違いと考えられる。「78」はIlse Leskien: „Schuld and other stories“ (Oxford german series), New York, 「79」はCarl Schurz: „Jugendjahre in Deutschland. Lebenserinnerungen“, Norwood, U.S.Aである。青島関係の記載は全くない。

[73] (344/ 80;7121) Galler, Louis: „Kapitän Satan. Abenteuer des Cyrano de Bergerac“ Leipzig, Druck und Verlag von Phillip Reclam jun.

- （ガレー「悪魔船長。シラノ・ド・ベルジュラックの冒険」）
- [74] (344/ 81;7122) Erckmann=Chatrian: „Madame Therese“, Leipzig, Druck und Verlag von Phillip Reclam jun.
- （エルクマン=シャトリアン「マダム・テレーズ」）
- [75] (344/ 82;7123) Smiles,Samuel: „Der Charakter“, Leipzig, Druck und Verlag Phillip Reclam jun.
- （サムエル・スマイル「性格」）
- [76] (344/1.2/83;7124) Ferry,Gabriel: „Der Waldläufer“,Roman, Erster Teil. Leipzig, Druck und Verlag von Phillip Reclam jun.
- （フェリ「森を行く人」第1巻）
- [77] (344/ 84;7125) Turgenjew,Iwan: „Neuland“ Roman. Berlin, Verlag von Otto Janke
- （ツルゲーネフ「新国」）
- [78] (344/ 85;7126) Wolter,Hans: „Lebensbild und Charakterzüge der Hohenzollerschen Fürsten seit dem dreißigjährigen Kriege. Für die Jugend und ihre Freunde“, Gütersloh, Druck und Verlag von E.Bertelsmann
- （ヴォルター「三十年戦争以来のホーエンツォルレン家君主の生涯像と性格」）
- [79] (344/ 86;7127) Wolter,Hans: „Kaiser Friedrich III. ,Ein Lebensbild des königlichen Dulders. Für das deutsche Volk und die deutsche Jugend“, Wittenberg, Verlag von N. Herrosé,1888
- （ヴォルター「皇帝フリードリヒ三世」）
- [80] (344/ 87;7128) Zola,Emil: „Therese Raquin“, Berlin,Schreibtsche Verlagshandlung
- （ゾラ「テレーズ・ラカン」）
- 「344/ 88;7151」 Felix Dahn: „Ein Kampf um Rom“(Boston ,New York,Chicago, D.C.Heath and co., publishers; 序言は1900年。)は「KYO-BUN-KAN,GINZA,TOKYO」の納入業者ラベルがあるので、鹵獲図書とは考えられない。昭和23年3月11日登録。
- [81] (344/ 89;7245) Weitbrecht,Richard: „Der Bauernpfeifer. Eine Wallfahrergeschichte aus dem 15.Jahrhundert“,Barmen, Verlag von Hugo Klein,1887
- （ヴァイトブレヒト「農民のバグパイプ弾き」）
- [82] (344/ 90;7246) Wick,Aug.: „Neue Menschen“, Berlin-Steglitz,Verlag Hans Priebe und Co.
- （ヴィック「新人間」）
- [83] (344 /91;7247) Tschechow,Anton: „Ein Duell“, Berlin, Verlag von Otto Janke
- （チェホフ「決闘」）
- [84] (344/1.2/92;7252) Savage,Richard Henry: „Die Hexe von Harlem“, (Engelhorn's Allgemeine Romanbibliothek / Eine Auswahl der besten modernen Romane aus aller Völker/Dreizehnter Jahrgang.Band 17.) Erster Band, Stuttgart, Verlag von J.Engelhorn,1897
- （サヴェジ「ハーレムの魔女」）

[85] (344/2-2/92;7253) Savage,Richard Henry: „Die Hexe von Harlem”

[84] と同一本。次の本は「344/ 93」のはずであるが、欠本である。

「洋書分類台帳」でも「93欠」と記載されてある。

[86] (344/1/94;7254) Turgenjeff,Iwan: „Federzeichnungen eines Jägers“, I ., Halle a. d. S., Druck und Verlag von Otto Hendel

(ツルゲーネフ「獵人日記」I)

[87] (344/2/94;7255) Turgenjeff,Iwan: „Federzeichnungen eines Jägers“, II ., Halle a. d. S., Druck und Verlag von Otto Hendel

(ツルゲーネフ「獵人日記」II)

[88] (344/ 95;7256) Stacpoole, Henry de Vere: „Fanny Lambert“ Engelhorn's Allgemeine Roman=Bibliothek. Eine Auswahl der besten modernen Romane aller Völker. 25. Jahrgang. Band 12., Stuttgart 1909

(スタクプール「ファニー・ランベト」)

[89] (344/ 96;7257) Aubyn, Alan St.: „Eine alten Jungfer Liebestraum. Ein Idyll“ Engelhorn's Allgemeine Roman=Bibliothek. Eine Auswahl aus der besten modernen Romane aller Völker. Zehnter Jahrgang, Band 4. Engelhorn, 1893

(オービン「老嬢の愛の夢」)

[90] (34/ 97;7258) Stöckert, Fanny: „Verdientes Glück. Erzählung für junges Mädchen“ Leipzig, Verlag von Abel und Mäler, 1900.

(シュテッケルト「しあわせ物語」)

[91] (344/ 98;7259) Sinclair, Apton: „Der Sumpf. Roman aus Chicagos Schlachterhäusern“ Verlag Adolf Sponholtz, Hannover 1906

(シンクレア「泥地」)

[92] (344/ 99;7260) Guilbert, Yvette: „Die Halb Alten (Les Demi-Vielles)“, Hermann Seemann Nachfolger, Leipzig

(ギルベール「半ば老いて」)

ロートレックのモデルのシャンソン歌手。

[93] (344/ 100) Wörrishöffer, Sophie: „Unter Korsaren. Irrfahrten, Abenteuer und Kämpfe auf der Südsee und Erlebnisse von Christensklave in Tripolis“, Zweite Auflage, Verlag von Belhagen und Klasing, Bielefeld und Leipzig 1896.

(ゾフィー・ヴェリスフェッファ「海賊の中で。キリスト教奴隷の南海の彷徨、冒険、戦闘とトリポリでの体験」)(1890初版)

[94] (344/ 101;7262) Wörrishöffer, Sophie: „Onnen Visser, der Schmugglersohn von Norderney“, fünfte Auflage, Verlag von Belhagen und Klasing, Bielefeld und Leipzig 1907.

ゾフィー・ヴェリスフェッファ「オネン・フィサー。ノルダーナイの密輸入の息子」(1885初版)

- [95] (344/1/102;7263) Stuart, John A.: „Der Staatsminister“, 1. Band, Friedrich Ernst Fehsenfeld, Freiburg i. B.
(ジョン・スチュアート「大臣」第1巻)
- [96] (344/2//102;7264) Stuart, John A.: „Der Staatsminister“, 2. Band, Friedrich Ernst Fehsenfeld, Freiburg i. B.
(ジョン・スチュアート「大臣」第2巻)
- [97] (344/1/103;7265) Verne, Jules: „Hektor Servadachs Abenteuer auf seiner Reise durch die Sonnenwelt“, Erster Band. Druck und Verlag A. Weichert, Berlin
(ジュール・ヴェルヌ「セルヴァダクの太陽世界の旅の冒険」第1巻)
- [98] (344/2/103;7266) Verne, Jules: „Hektor Servadachs Abenteuer auf seiner Reise durch die Sonnenwelt“, Zweiter Band. Druck und Verlag A. Weichert, Berlin
(ジュール・ヴェルヌ「セルヴァダクの冒険」第2巻)
- [99] (344/ /104;7267) Sims, George R.: „Möblierte Wohnungen einer Vermieterin“, Engelhorn's Allgemeine Romanbibliothek. Eine Auswahl der besten modernen Romane aller Völker. Erster Jahrgang. Band 24. Verlag von J. Engelhorn, Stuttgart.
(シムズ「女家主の家具付き部屋」)
「65」と同一だが、表題紙に出版年がない。
- [100] (344/ /105;7417) Sommerfeld, Adolf: „Das Geheimnis der Kammorra. Des Geheimbundes Ursprung und Wesen“, Verlag Continent G.m.b.H, Berlin
(アドルフ・ゾンマーフェルト「カモラの秘密。秘密組織の原初と本質」)
- [101] (344/1/106;7426) Horn, Karl: „Die Sozialisten“, Engelhorn's Allgemeine Romanbibliothek. Eine Auswahl der modernen Romanen aller Völker. Zweiter Jahrgang. Band 5. Verlag von J. Engelhorn, Stuttgart 1885.
(カール・ホルン「社会主義者」)
- [102] (344/2/106;7430) Horn, Karl: „Die Sozialisten“ (「101」に同一本)
- [103] (344/ /107;7427) Amicis, Edmonde De: „Die Reise des kleinen Marco von den Apenninen zu den Anden“, Den Kindern dargereicht vom Verein für Verbreitung guter Schriften in Basel, Basel.
(エドモンド・デ・アミーチス「幼いマルコのアペニン山脈からアンデス山脈への旅」；「母をたずねて三千里」で知られる)

(以上計 108冊)